

## 【論文】

『梅光言語文化研究』第6号(2015年) pp.1・51  
© 2015年 梅光学院大学国際言語文化学会

---

# 英語談話標識の諸相 (2)

— 談話標識についての基本的考え方と分析の観点 —

松尾文子・廣瀬浩三

This paper deals with basic notions and analytical viewpoints on discourse markers in English as the practical aspects of them in contrast to the theoretical ones discussed in Matsuo & Hirose (2014). The organization of the main discussions in this paper is as follows: the general features of discourse markers in section 2; the relationship between the semantic features and functional ones in section 3; the viewpoints for practical analysis of discourse markers in section 4; the redefinition of discourse markers in section 5; directions for further studies on discourse markers in section 6.

キーワード：談話標識の特徴，談話標識分析の観点，談話標識研究の方向性

## 1. はじめに

本論は、英語談話標識の諸相を体系的に記述することを目指し、松尾・廣瀬(2014)と補完的に談話標識研究の実践編として改めて談話標識を特徴付け、それらをどのような観点から分析していけばよいのか、具体例を示しながら詳述するものである。

まず、第2節で談話標識の一般的特徴を整理し、次に、談話標識の理解を深めるため、その分析の中心となる談話標識の意味的特徴と機能的特徴の考え方を第3節でまとめておきたい。第4節が本論の中心部分となるが、談話標識分析の20の観点を述べ、それぞれの観点から眺めた具体例を示す。そして、第5節で再び原点に戻って、談話標識の本質を明らかにしておきたい。最後に、今後の談話標識研究の方向性を示す。

## 2. 談話標識の一般的な特徴

談話標識の一般的な特徴については、松尾・廣瀬(2014)で概観した談話標識の研究の歩みの中で見たように、1980年代後半から Blakemore の関連性理論に基づく一連の研究において談話標識に注目が集まり、1990年代になり、Fraser を中心とした体系的

な研究が次第に進む中、盛んに論じられるようになった。また、1990年代後半において相次いで出版された談話標識に焦点を当てた研究書や論文集である Briton (1996) や Jucker & Ziv (1998) においても、簡潔に談話標識の一般的特徴がまとめられている。そして、談話標識の一般的特徴を語る上で、談話標識全体を真っ向から論じた Schourup (1999) は注目に値する。こうした先行研究を踏まえ、以下、網羅的ではないが、談話標識の一般的な特徴をまとめておく。

## 2.1 語彙的・音調的特徴

談話標識として機能する一連の表現について、語彙的な特徴としてまず気づくことは、雑多な品詞から構成されるということである。また、一語から成るものが多いが、句レベル、節レベルのものも含まれる。以下、主だったものを挙げておきたい。

単独の語：副詞 (*actually, anyway, besides, first(ly), however, like, now, then, though, etc.*)

接続詞 (*and, but, so, etc.*)

間投詞 (*ah, huh, oh, okay, uh, well, etc.*)

句：前置詞句 (*according to, after all, at last, by the way, in fact, in other words, on the other hand, etc.*)

不定詞句 (*to be honest, to tell you the truth, etc.*)

レキシカル・フレーズ：(*I mean, you know, you see, if you don't mind, if you like, etc.*<sup>1)</sup>)

この他、単独の語では、注意喚起する *look* や *say* などのように動詞から転じたものや、*right* や *OK* のように形容詞からしだいに副詞化していったもの、さらに、以下の例に見られる *correction* や *period* のような名詞から派生した特有の用法も談話標識として含めることができる。*correction* は、通例、(1a) のように自らの言葉の修正に用いられるが、(1b) では相手の言葉を訂正するのに用いていることに注意されたい (⇒第4節 観点14)。また、*period* は「以上、いいね」という意で、この語を付すことによって相手に有無を言わず発話を打ち切ったり、念押しする働きがある (⇒第4節 観点10)。

(1) a. I feel so terrible. *Correction*, I feel nothing. Which is worse.—E. Segal,

*Oliver's Story* (とてもひどい気分だ。訂正、何も感じない。より悪い症状だ。)

- b. “You still have a chance to enjoy the relationship.” “*Correction. She has a chance to enjoy the relationship. I’m not sure I would.*” —S. Grafton, “*J” Is for Judgment* (「あなたにはまだ彼女との関係を保っていく見込みがありますよ」「いや違う。彼女の方にはその可能性はあるけどね。僕にはそうしていく自信はないよ」)
- (2) a. “He is a little dog but a lot of people won’t break into a place if there’s a dog, no matter what size it is. They’re just scared of dogs, *period.*” —L. Block, *A Walk among the Tombstones* (「この子は小さな犬なんですけど、どんな大きさでも、もし犬がいれば、多くの方は家に押し入ろうとはしないものですよ。人は犬を怖がる、それだけのことです」)
- b. “He never served,” I said. “He was never in Vietnam?” “He was never in the service, *period.*” —L. Block, *A Long Line of Dead Men* (「彼は兵役についてたことはない」と私は言った。「彼はベトナムにいたことがないのですか?」「兵役についてたことは決してない、確かだ」)

このように、談話標識は伝統的な単一の語類では集約できず、1つの文法的カテゴリーは形成しているが、従来の品詞という概念はなじまない。こうした雑多な談話標識をどのように捉えておけばよいのかについては、3.1を参照されたい。

音調的な特徴としては、ポーズを伴い、独立した音調群を形成することが多く、書き言葉では、通例コンマが付される。一例を挙げると、(wh)疑問文に先行する *right* や *OK* の場合は、(3)のように、通例、ポーズを伴い、コンマが付される。

(3) *Right (then) / OK now, how many of you know each other?*

—Quirk et al. 1985: 633

そして、談話機能に応じて様々な音調を伴う。最も分かりやすい例として、談話標識が単独で用いられる *well* の例を見てみよう。

(4) a. [someone has just left the room after losing their temper]

*Well.*[intonation fall]

b. A: Have you done the essay?

B: *Well.*[intonation rise]

—Blakemore 2002: 132

(4a) では「おやまあ」と発し、驚きやあきらめといった感情が伝わり、(4b) では「ええと、そのう」とだけ述べて、言いたくない、あるいは、はっきりとした応答を避けていることが表される。同様に、Ball (1986: 117-118) においても、*well* について、音調によって様々な意味が伝わることが述べられている。

- (5) a. *Well*...? [Rise intonation] Interrogative: “What do you want? What have you got to say?”  
 b. *Well*... [Rise-fall-rise intonation] Indecision: “I’m not sure. Maybe.”  
 c. *Well*... [Rise-fall intonation] Concession, often reluctant: “You may be right, but...”

以上の記述にある通り、(5a) のように上昇調で発話されると、一般に、相手に情報を求めることになる。やや複雑な上昇・下降・上昇調となる (5b) では、優柔不断さや自信のなさが表される。また、上昇・下降調の (5c) では譲歩的な響きやためらいの響きを伴うことになる。<sup>2</sup>

## 2.2 統語的特徴

談話標識は、文頭に現れることが多いが、文中や文尾に生じるものもある。それぞれの談話標識によってどの位置が好まれるかには個々の談話標識ごとに差がある。通例文頭で用いられるものには *but*, *so*, *now* など数多くあるが、*though* のように、文尾、あるいはときに文中に生じ、文頭では用いられないものもある。

- (6) I’m afraid he doesn’t eat much these days—but he looks pretty fit, *though*.

—Quirk et al. 1985: 632

他方、次の *however* は、文頭、文中、文尾のいずれの位置でも用いられる。

- (7) Raccoons and bears are related animals.  
 a. *However*, raccoons are much smaller.  
 b. Raccoons are much smaller, *however*.  
 c. Raccoons, *however*, are much smaller.

—以上、Celce-Murcia & Larsen-Freeman 1999<sup>2</sup>: 522

やや規範的な語法書によっては、文頭にくる *however* は音声的に間延びするので避けた方がよいとする見解もあるが [cf. Garner 2000: 173]、*however* は、文頭・文中・文尾のいずれでも用いることができる。頻度的には、文中が多く、特に主語の後で用いられると焦点化機能を担う (⇒第4節 観点7)。焦点化される要素に音調的際立ちがあり、先行発話の同様の要素をキャンセルする。類義語の *nevertheless* にはこのような機能はない (Bell 2010: 1917)。なお、一般的に文尾では先行発話に対して追加陳述的に何かを加える機能がある。

このように、談話標識の位置の特徴として、文頭、文中、文尾に生じる可能性があるが、談話標識によって表す機能と関連し、生じやすい位置についての傾向が見られる。ただし、命題内容との関係で言えば、共通して命題の構成要素の外側に生じる、あるいは統語構造に緩やかに付加されて生じ、直接、命題内容とは関わらないものとして位置づけられる。したがって、統語的要素としては、選択的なものとなり、談話標識を省略しても、先行文との関係で意味的・語用論的、あるいは談話的には不自然な文になることはあっても、一般にその生じる文自体の文法性には影響を与えない。

談話標識の統語的特徴の1つとして、複数の談話標識が共起することがあることにも注目しておきたい。典型的な例としては、適切な言葉が見つからず、談話標識によって時間かせぎをする用法において、しばしば複数の談話標識が用いられる (⇒ (10)、第4節 観点12)。

- (8) “You did (=thought about me)?” “Yes. I mean, seeing you again. *I mean, well, you know, seeing again after so many months.*” —K. Harper, *Falling in Love*  
 (「あなたも?」「ええ。また会えたらって。つまり、そのう、ほら、久しぶり会えたらって」)

さらに、談話標識は、幅広い文脈の中では、その一語に話者の意図が込められ、単独で用いられることがある。次例は、関係が破綻した夫婦の電話での会話で、言い争いになっている。ぎこちない会話が、談話標識を介して何とか続けられていく。

- (9) “Don’t you curse at me, Macon Leary!” They paused. Macon said. “*Well.*”  
 Sarah said, “*Well, anyhow.*” —A. Tyler, *The Accidental Tourist* (「怒鳴らないでよ、メイコン・リアリ!」2人は黙った。やがてメイコンが「じゃあ」と言うと、サラは「じゃあとにかく」と続けた。)

談話標識の単独用法としては、様々な発話行為に対する応答表現として用いられることが多いが、*And?* / *But?* / *So?* や *Like?* / *Such as?* などのように、相手から追加情報を求め、発話を促す独自の用法もあり、詳細な研究が必要である。この発話を促す一連の表現形式について詳しくは、広瀬（2000）を参照されたい。

### 2.3 意味的特徴

談話標識の意味的特徴としては、それ自体で、概念的意味をほとんど、あるいはまったく持たないものが多いことが指摘できる。これについても談話標識それぞれの項目によって意味の濃淡があるが、次例で用いられている談話標識についても、談話的には重要な機能は果たしているものの、談話標識自体の概念的意味は薄いと言える。(8)の類例となるが、以下の例で、*well, you know, I don't know, really, I mean, just, sort of* は、いずれも時間稼ぎとしての機能は果たしているが、概念的意味は薄れている。

(10) Why did you do that? ~ Oh, *well, you know, I don't know, really, I mean*, it is *just sort of* seemed a good idea.—Swan 2005<sup>3</sup>: 144

他方、本論では、一般に文副詞と呼ばれる一連の語句を話し手の態度を表す談話標識として認めているが、これらの文副詞ではそれぞれが概念的を保持していると言える。詳細は、Ifantidou-Trouki（1992）に譲るが、その例として発話意図が興味深い *frankly* と *honestly* の例を上げておきたい。

- (11) a. “*Frankly*, director, I’m shocked that you would even entertain these lunatic ravings.” —D. Brown, *Deception Point* (「率直に言って、局長、あなたのような方がこんな馬鹿げたたわ言に気持ちが傾こうとしているなんて、ショックです」)
- b. “*Frankly*, for your sake, I wish you would drop this whole matter. If you won’t, then be careful.” —S. Sheldon, *The Sky Is Falling* (「あなたのためを思って率直に言いますが、この件からはすっかり手を引いていただきたい。手を引く気がないなら、心してやりなさい」)

いずれの例でも丁寧な口調となっているが、(11a) では *frankly* に相手を非難する言葉が、(11b) では警告の言葉が後続している。このように、*frankly* の後には相手にとつ

ては好ましくない内容が後続することが多く、*frankly* によって「あなたにとって好ましくないことを率直に言わせてもらおうよ」という意図を伝えていることに注意されたい。同様に、*honestly* について少し考えてみよう。(12a) はある貴族の邸宅に滞在していた伯爵夫人がメイドに話す言葉である。また、(12b) は友人のデイヴィッドにある女性と会うのかと尋ねられた映画のシナリオライターの返答である。

(12) a. Lady Trentham: *Honestly*, it's getting so expensive, by the time one does Jennings and leaves something for the housemaids, one might as well have taken a suite at the Ritz.—*Gosford Park* [映画台本] (「正直に言うと、すごくお金がかかるわ。(貴族の執事の) ジェニングスにお金を渡して、メイドたちに何やかやとしてやったら、リッツ (ホテル) のスイートに泊まれるぐらいになるわ」)

b. Bunny: Uh... no, David. I, I hav- I haven't had any time, you know. I...see, I'm doing some re-writes for my dear friend, Marilyn Monroe. And I feel kinda funny since you guys got divorced. Besides, I, I haven't had time to see anybody, *honestly*.—*Guilt by Suspicion* [映画台本] (「ああ、いや、デイヴィッド。僕、僕には、時間がないんだよ。僕は... あのさ、親友のマリリン・モンローの記事の書き直しをやってるんだ。それにあんた達が別れてから何だか妙な気分なんだ。それに第一、人と会う時間なんてないんだ、正直なところ」)

(12a) では少し言いにくい話し手自身の不満が表明されており、(12b) では女性と会えない理由を並べて、最後に *besides* によって決定的な理由を述べているが、*honestly* を添えることで、自分では時間のやりくりがうまくいかないことを正直に説明している。このように *honestly* は、不本意な気持ちを察して自分の主張を理解して欲しいと相手に訴えかける意図を示すのに用いられる。

以上の例から分かるように、*frankly* と *honestly* は、「率直に言えば」「正直言うと」のように、概念的意味は保持しているものの、後続する内容に対する話し手の態度を表し、その矛先は相手の聞き手に及び、文脈の中で巧みに用いられていることに注意されたい。

談話標識の意味論的理解として大切なことは、その概念的意味の保持いかんに関わらず、文の真偽値には影響を与えないということである。以下の *so* 及び *after all* について考えてみよう。

(13) Barbara isn't in town. *So / After all*, David isn't here.—Blakemore 1992: 136

ここでは、*so* や *after all* がなくても「バーバラが町にいない」という事実と、「デイヴィッドがここにいない」という事実は変わらない。つまり、*so* と *after all* は文の真偽値には関わらないのである。両語が関わるのは、前件と後件のつながりである。*so* は前件から導き出される推論結果を、*after all* は前件のように述べる理由を後件で導入している（⇒第4節 観点4）。

#### 2.4 機能的特徴

談話標識の機能的特徴の探求は、談話標識研究の中心的な部分となるが、ここでは、談話標識の一般的な機能的特徴として、多機能であり、1つの談話標識がいくつかの談話レベルで機能することが多いという指摘に留めておきたい。詳細は第3節を参照されたい。

#### 2.5 社会言語学的・文体的特徴

この節では、一般に言語使用域 (register) と呼ばれる社会言語学的・文体的特徴を簡単にまとめておきたい。

文体的には、書き言葉より話し言葉で用いられる場合が多く、特に、くだけた言い方で頻度が高くなる。コーパスを駆使して書かれた Biber et al. (1999: 886-889) によると、特に会話で多用される談話標識は結果や推論を表す *so*, *then*、対比や譲歩を表す *anyway*, *though* で、英国英語と比べて米国英語では *so* の使用頻度が高く、*then* は低い。学術的な文では、*however*, *thus*, *therefore*, *for example* が多用されるが、書き手の嗜好が反映されるとの指摘がある。また、対比を示すには書き手を問わず *however* が好まれるが、結果を表す *therefore*, *thus*, *hence* の使用にはばらつきが見られるとのことである。

また、談話標識には、地域的要因、性別、年齢、社会階層用いられる場面などによる特徴がある。<sup>3</sup> Biber et al. (1999: 1097) では、付加疑問文的に文尾に添えられて相手の反応を促す *huh?*, *eh?* に関しては、*huh* が米国英語で、*eh* が英国英語で多く見られるとする。しかし、英英辞典の記述を見ると英米の差を認めていないものもあるし、米国英語でも *eh* はかなり用いられるようである。性別に関しては、Lakoff (1973) や Holmes (1995) は、垣根表現 (hedge) の *sort* [*kind*] *of* は女性が好むとする。また、Tagliamonte (2005) や Siegel (2002) は同じく垣根表現の *like* は、若者、特に女子が多用するとしている。

以上の言語使用域についての特徴は、時代とともに変わるものであり、以前と比べて性差や年齢差、地域差は少なくなってきたように思われる。ただし、この社会言語学的・文体的特徴は、個々の談話標識の特徴づけにおいて重要な部分であることは心に留めておきたい。

### 3. 意味的特徴と機能的特徴の考え方

#### 3.1 談話標識をプロトタイプ的に捉える

これまでの談話標識の研究における大きな問題として、体系的な研究がなされてこなかったという点が挙げられるが、根本的な原因は談話標識の定義が定まらず、どのような言語表現を含めるのかコンセンサスがなかったことにある。「談話標識」の名称については、松尾・廣瀬 (2014) の注 1 を参照されたい。本論では、談話標識という 1 つのカテゴリーを認める際に、以下のようなプロトタイプ的な考え方をとっておきたい (cf. Jucker & Ziv 1998)。

- ① 談話標識は 1 つの文法的カテゴリーを形成しているものと捉えるが、そのカテゴリーは、名詞、形容詞、動詞、副詞といったいわゆる品詞的なカテゴリーと並列的なものではなく、高次的な機能的・意味的カテゴリーとして捉える。したがって、成員については種々の品詞、複数の構成要素を持つ言語表現を認める。接続詞、副詞、前置詞句、間投詞などが主な成員となるが、最近注目を集めているレキシカル・フレイズと称されるものも、一部その射程に入れる。
- ② カテゴリーを形成する成員の意味的・機能的特徴については、ある一定の共通した特徴は認められるにせよ、すべての特徴を各成員が共有するとは限らない。ある成員は極めて「談話標識的」であるが、ある成員は文の構成要素の一部としても機能し、談話標識としては「周辺の」であるといった段階性 (gradience)、あるいは連続性 (continuum) を持つカテゴリーとして捉える。このような捉え方によって、接続詞、副詞、前置詞句、間投詞やレキシカル・フレイズ本来の用法から談話標識に展開して行く過程が分かり、談話標識の特徴がより明らかになる。このことは、文法化 (grammaticalization)、(間) 主観化 ((inter)subjectification) といった歴史語用論的視点から意味機能を記述することで裏付けられる。歴史語用論的アプローチについては、松尾・廣瀬 (2014) の第 6 節を参照されたい。
- ③ 談話標識に共通する中核的な特徴としては、その名が示すように「談話レベルで機能し、話し手の何らかの発話意図を合図する談話機能を備えている」という点が挙

げられる。ただし、ここでいう「談話」(discourse)は広義に捉えて、談話標識が現れる前後の文脈、さらにテキストとして具現化される文脈のみならず、発話状況(utterance situation)を含むものと解釈する。さらに、その発話状況に参加する話し手・聞き手の知識やコミュニケーションの諸要素が談話標識の機能に関与する。

### 3.2 意味的特徴に関する3つのアプローチ

意味的特徴として、談話標識は命題内容の一部として文の真偽値に関わる意味を(ほぼ)持たないと述べたが、関連性理論における議論のように、談話標識自体が何らかの「言語的意味」、あるいは「談話機能」を持っていることは明らかであり(cf. 松尾・廣瀬(2014) 4.)、それをどのように捉えるのかについては、以下の3つの主な考え方がある(cf. Jucker 1993; Cuenca 2008; Schourup 1999, 2001)。

- ①同音異義語的アプローチ(homonymy approach)：談話標識が複数の用法で用いられる場合に、それぞれの意味を同音異義語的に捉える考え方。
- ②単一意味的アプローチ(monosemy approach)：談話標識に中核的な共通の意味を認め、その中核的な意味から全ての用法、あるいは派生的意味を説明していく考え方。
- ③多義語的アプローチ(polysemy approach)：談話標識が複数の用法を持つ場合に、多義語的に捉える考え方。

①のhomonymy approachについては、一語一義的に、各意味用法を一つずつ別の語彙項目として記述していく考え方となるので、意味の羅列となってしまう、相互の意味関係も捉えにくく、望ましい考え方とは言えない。②と③の考え方については、学者によって立場が分かれ、FraserとSchiffrinはmonosemyの、Aijmerはpolysemyの立場を取る(Fischer 2006)。

本論においては、実用的に談話標識の理解を深めるという観点から、②と③の折衷的な立場をとり、基本的には多義語的アプローチを支持し、意味的・機能的ネットワーク、あるいは用法的ネットワークを考えていくといった立場をとるが、同時に、単一意味的アプローチ、あるいは中核的意味アプローチ(core meaning approach)とも呼べる立場から、可能な一般化を図り、談話標識の全体像を眺めていくという研究姿勢を保っていききたい。

### 3.3 4つの機能レベル

機能的特徴については、さらに詳しく考察することが必要である。談話標識の大きな特徴として「多機能性」がある。談話標識が機能するレベルについては、大きく以下の4つが考えられる。<sup>4</sup>

- ① textual function (談話の構成と関わる機能)
- ② information function (情報の授受・交換と関わる機能)
- ③ attitudinal function (話し手の発話態度や感情と関わる機能)
- ④ interpersonal function (話し手と聞き手の対人関係を調整する機能)

以下、それぞれの機能について若干の解説を加える。

まず、textual function (談話構成機能) について言うと、談話標識には、話し手が談話をどのように組み立てていくのかを合図する機能がある。直前の発話や文との関係を表すことが多いが (local)、より大きな談話の構成や一連の談話全体と関わって、談話の開始や終結などを合図する機能も持つ(global)。その場合、会話の順番取り (turn-taking) とも関わることもある。

先行文脈あるいは後続する発話や文と関わって談話構成を合図する機能を持つ例として、付加を表す *and*, *besides* など、逆接・譲歩を表す *but*, *however* など、(推論) 結果を表す *so*, *then* など、修正・訂正を表す *I mean*, *in other words* などがある。より広い文脈と関わって談話構成を合図する機能を持つ例として、談話開始を合図する *now*, *so* など、話題転換や本題回帰を合図する *by the way*, *anyway* など、談話の終結を合図する *anyway*, *okay* などがある。

次に、information function (情報授受・交換機能) は、談話標識には、話し手が情報を受け取ったことや、新旧いずれの情報を伝達しようとしているか、情報を聞き手と共有したいかなどを合図する機能があり、そのような機能のことを言っている。情報を受け取ったことを合図するものとしては、*oh*, *ah*, *yes* などがある。情報を発信するものとしては、新情報を伝える *actually* など、情報の共有を望む *you know*, *you see* など、情報の一部に焦点を当てる *like* などがある。

第3の機能として、attitudinal function (態度・感情表明機能) が認められ、談話標識には、これからどのようなスタンスで発話するのかを合図する機能を持つものがある。述べていることに対する評価を示す *amazingly*, *(un)fortunately* など、発話様式を合図する *frankly*, *seriously* など、述べていることに関する確信の度合いを示す *certainly*, *of*

course など、驚きや苛立ちなどの感情を表す *actually, you know what?* などがある。そのほかに、情報源を示す *allegedly, according to* などもある。

最後に、interpersonal function (対人関係調整機能) を認めておきたい。談話標識には、会話を円滑に進めるために話し手と聞き手の人間関係を調整する機能を持つものがある。しばしば、逆接やためらいを表す談話標識がこの機能を持つ。聞き手に対する配慮や敬意を表して丁寧表現となるものとして *actually, well, if you like* などや、自己防御のためにためらいや控えめな態度を表す *kind of, at least* などがある。

以下、これら4つの機能レベルを考慮しながら、談話標識を分析するに当たってどのような観点に立つべきかを考えていく。

#### 4. 談話標識の分析の観点

すでに論じてきたように、談話標識の分析の難しさは、談話標識に多種多様なものがあり、機能するレベルについてもいくつか考えられ、画一的な分析が困難であるという点にある。以下、どのような観点から談話標識を眺めていけばよいのか、20の観点を示す。本論で示す観点は、多くの談話標識に適用できるやや包括的な観点から、特定の談話標識にのみあてはまる個別的な観点も含まれるが、全体としてできるだけ網羅的なものになるよう、様々な観点を提示したい。

##### 4.1 先行発話との関わりを考える

談話標識に共通する特徴は、話し手と聞き手の認知状況を含めて、文、あるいは単一の発話を越えて機能するという点である。したがって、言語学的には、まず先行発話との関係を見ていくことにする。なお、以下の記述において「先行発話」には先行文も含める。

**観点1 (意味論的)** 談話標識が、後続する内容が先行発話に対してどのような論理的接続関係を合図しているかを考察する。

この観点では、主として先行発話との論理的関係を明示する機能に注目し、逆接・対比、結論、付加といった様々な意味関係を考えていくことになる。談話標識の明示的な概念的意味によって、そうした意味関係が理解できる。

(14) a. “We really can’t afford to buy any new equipment at present.”

- “*Nevertheless*, we need to invest to keep up with our competitors.” —*CIDE*
- b. The book has no narrator or main character. *Consequently*, it lacks a traditional plot.—*LAAD*
- c. Yoko didn't want to go out for a walk. The weather was wet and miserable. *Besides*, she had a headache.—Leech et al. 2001: 65

(14a) の *nevertheless* は逆接を、(14b) の *consequently* は結論を、(14c) の *besides* は付加を表している。詳しい論理的関係の種類については、松尾・廣瀬 (2014) ですでに示した先行研究の中では、Halliday (1985 / 1994<sup>2</sup>) が最も詳しく、Quirk, et al. (1985<sup>2</sup>) の分類が参考になる。<sup>5</sup>

観点2 (語用論的) 談話標識がどのような (会話的) 含意を合図するかを考察する。

この観点では、談話標識を話し手の発話意図を明示する標識として捉え、文字通りの解釈に加えて、発話が含まれる意味内容を考察することになる。その際、談話標識の含意がどのような会話の公理 (conversational maxims) と関わって、その遵守及び違反を合図しているのかを説明することによって、発話意図を明らかにしていくことができる。

Grice (1975 / 1989) によると、会話を首尾よく進めるために、会話に携わる者は協調の原理 (cooperative principles) を守らなければならない。この原理には4つの公理 (maxims) がある。①量 (quantity) : 過不足なく適切な量の情報を示せ ②質 (quality) : 真実だと思っていることを話せ ③関連性 (relevance) : 関連のあることを話せ ④様式 (manner) : 明確に話せ、ということである。しかし、話し手は常にこれらの公理を遵守するわけではなく、時に違反せざるを得ない場合がある。その際によく用いられるのが、垣根表現 (hedge) としての談話標識である。

- ① 量の公理に対する垣根表現 : *roughly, so to speak, well* などで、情報が期待される量よりも多すぎたり少なすぎたりすることを示す。以下の例では、「まあちょっと、歩くには遠すぎるね」と、情報量は求められる量よりも少ないことが示唆される。

(15)A: How far is it?

B: *Well, it's too far to walk.*—Brown & Levinson 1978: 167

- ② 質の公理に対する垣根表現：話し手が自分の発話の真実性について完全な責任を負うわけではないことを示唆する。*I think / believe / assume* などの表現のほか、*according to...* についても、情報源を明示する表現として後続する内容の真実性を保っていることを合図する標識として理解できる。to 以下には、公的機関・人名・書名・調査研究・報告・ニュースなどの情報源を示す語句がきて、しばしばそれらは権威のある人物や文献であることが含意される。(16a) では権威ある人物とまでいかないにしても、彼らのことをよく知っている Sarah を持ち出して、後続の発話に客観性を持たせている。(16b) では、国防省の記録に基づく発話とし、相手からの疑義は回避できる。

(16) a. *According to Sarah they're not getting on very well at the moment.*—

*CALD*

b. Powell: *According to the Department of Defense, he's been dead for two years.*—*Die Hard 2* [映画台本] (「国防省によると、彼は2年前に死んでるよ」)

- ③ 関連性の公理に対する垣根表現：例えば、話題転換を合図する *by the way* や *incidentally* は、主たる話題から逸れることを明示的に合図して、この公理には違反することを断ることになる。ただし、実際の用法では、以下の例のように、実は話し手にとって重要な内容を導入する場合もあることに注意しなければならない。

(17) a. *By the way, I wonder if we could discuss my salary some time.*—*LD*<sup>2</sup>

b. *Incidentally, what happened to that book I lent you? I'd like it back.*

—Chalker 1984: 194

- ④ 様式の公理に対する垣根表現：いわゆる様態副詞などを文頭において、どのような様式で述べているのかを合図する。以下の例では、談話標識が繰り返されて、様式の公理を遵守しながら慎重に意見を述べていると説明できる。

(18) On October 17, there was a small riot in Eliot House. *More specifically,*

a demonstration against classical music. *Still more specifically*, a demonstration against Danny Rossi. *To be extremely precise*, the actual aggression was not against the man but his piano.—E. Segal, *The Class*

(10月17日にエリオットハウスでちょっとした騒動があった。もっと具体的に言えば、クラシックミュージックに対するデモ騒ぎだ。さらにもう少し具体的に言えば、ダニー・ロッシに対する抗議であった。極めて正確な言い方をすれば、実際の攻撃は彼自身に対してではなく彼のピアノ演奏に対するものであった。)

観点3 (語用論的) 談話標識がどのような発話行為と関係しているか、あるいは、発話行為のどのような発話条件と関わっているかを考察する。

発話行為の種類等については、これまでの語用論の成果を踏まえると、命令、要求、依頼、提案、申し出等、特に、聞き手との相互関係を必要とする発話行為との関わりが主たる関心事となる。観点1からは、逆説を表すと特徴づけられる *but* を例に見てみよう。

(19) a. “I order you to sit down.” “*But*, you don’t have the right to order me.”

—Fraser 2006b: 84

b. “It’s just the thing for your wife.” “*But* I’m not married.”

—Leech et al. 2001: 71

(19a) では座れという命令を受けて、「あなたには命令する権利などない」と「命令」という発話行為を遂行する条件を否定している。(19b) では「奥さんにどうぞ」という発話を受けて、「自分は未婚だ」と当該の発話をする前提条件を否定している。このように、文頭にくる談話標識の *but* は、先行発話が示唆する予想を覆す用法からさらに発展し、先行発話の発話行為と関わることもあるのだ。

また、*please* は、依頼を表す談話標識として機能し、単なる陳述、約束、申し出、招待、脅迫などを表す発話とは通例共起しない。

(20) a. \*He ate more pudding, *please*.

b. \*I promise you can have some more pudding, *please*.

c. \*Would you like more pudding, *please*?

d. \*Do you want to come to a party, *please*?

e. \*Give me more pudding or I'll hit you, *please*.—以上、Stubbs 1983: 72

さらに、*please* は、通例、意向を尋ねる疑問文や申し出、許可を求める発話の応答表現として用いられる。ただし、陳述や純粋な疑問文、さらに依頼を表す発話の応答表現として用いるのは、通例不可となる。

(21) a. A: That's a nice hairdo. B: \**Please*.

b. A: Have you got the time? B: \**Please*.

c. A: Will you open the door? B: \**Please*.—以上、Stubbs 1983: 72-73

以上の語用論的な考察をさらに一般化していく際に、関連性理論の成果を踏まえた観点も有力である。理論言語学の援用は、それぞれの概念を正確に理解した上で慎重に行うべきであるが、関連性理論の観点からは、以下のような分析の観点を設定できる。

観点4 (関連性理論的) 談話標識がどのような手続きの意味を合図しているかを考察する。

関連性理論では、談話標識は、後続する文の真偽値に関わる概念的意味を表すのではなく、その意味解釈を導く手続きの意味を担うと規定され、発話などから得られる新たな情報は既存の想定(情報の受け手が持っている旧情報)と相互に関係しあって何らかの文脈効果(contextual effects)を生み出すと説明される。具体的には以下の3点から、文脈効果を考察する。それぞれの文脈効果を理解するために、同じ発話に異なる談話標識を付すことによって、どのような文脈効果をもたらすか、考えてみよう。

①文脈含意(contextual implication)を生み出す文脈効果を合図するか: 文脈含意とは、既存の想定に新しい情報が加わって導き出される結論で、*so* や *therefore* などがこの合図をする。

(22) Barbara isn't in town. *So* David isn't here.—Blakemore 1992: 136

②既存の想定を強化する(strengthening existing assumptions) 文脈効果を合図するか: 新しい情報によって既存の想定が強化される場合で、*after all* や *moreover*

などがこの合図をする。

(23) Barbara isn't in town. *After all*, David isn't here.—*ibid.*

③既存の想定を否定・削除する (contradicting and eliminating existing assumptions) 文脈効果を合図するか：新しい情報が既存の想定と矛盾し、既存の想定が取り消される場合で、*but* や *however* がこの合図をする。

(24) Barbara isn't in town. *However*, David isn't here.—*ibid.*

前件の「バーバラは町にいない」ことと後件の「デイヴィッドはここにいない」ことの関係が、談話標識によって示される。このように、談話標識は談話（発話）をどのように解釈すべきかに関するガイド役を果たす。

このように、関連性理論の文脈的效果を勘案することによって、文字通りの意味論的論理関係よりも幅広く談話標識の機能が理解でき、その発話意図も観点2とは異なる形で理解できるのである。関連性理論との関係については、松尾・廣瀬 (2014) の第4節を参照されたい。

#### 4.2 情報との関わりを考える

談話標識は先行発話、あるいは後続発話との関係で、情報性について合図することがある。そして、情報の産出及び受容に関わって何らかの合図を行う。したがって、情報性と関わって、以下の観点からの分析が必要である。

観点5 (機能的) 談話標識が新情報、あるいは旧情報とどのような関わりがあるかを考察する。

以下の例で、*actually* と *after all* を情報的な観点から考えてみよう。

(25) a. “Hello, John.” “*Actually*, my name's Andy.” —Swan 2005<sup>3</sup>: 144

b. You have to have another drink. *After all* it is your birthday.

—Blakemore 1992: 140

(25a)は後続に新情報が来ること、(25b)は旧情報が来ことを示す。(25a)の*actually*は、後続の発話が聞き手にとって予想外のことを伝える合図をしている。ほかに*oh*は通例予想外のこと、多くの場合は驚くような内容の情報を受けたことを合図する。(25b)の*after all*は「だって～なんだから」と先行発話の内容を支持する聞き手にも既知の情報を導入している。この他、*you know*が話し手と聞き手の共有情報と共に用いられるが、戦略的に新情報と共に用いて、「当然知ってるよね」というニュアンスで、ある意味、押し付け的に用いられる場合もある。次の宣伝的な発話では、こうした戦略がうまく利用されていると言える。

(26) *Y'know, there's nothing quite as refreshing as a Coca-Cola.*

—Schourup 1985: 109

観点6 (機能的) 談話標識が情報の産出、あるいは情報の受容とどのような関わりがあるかを考察する。

ここでは、Jucker & Smith (1998: 172-174) に基づいて説明しておきたい。談話標識には、情報の産出者が用いるものと、受容者が用いるものがある。産出を合図するものには、*you know, I mean, well*のように話し手自身がさらに情報を続けたり、修正したりするものがある。受容を合図するものには、*yeah, oh, okay, well*のように相手が提示した情報に対する反応を合図するものがある。*well*のように、両方の機能を持つものもある。

(27) a. *Well, I think it's time to go.*

b. A: Is it time to go?

B: *Well...*

c. A: Is it time to go?

B: *Well, I think most people will be coming from across campus.*

—以上、Jucker & Smith 1998: 174

上記の*well*を伴う発話は、それぞれ(27a)は情報の産出を、(27b)は情報の受容を(27c)は情報の産出と情報の受容を同時に合図している。

観点7 (機能的) 談話標識が情報の焦点化とどのように関わっているかを考察する。

特に、談話標識が文中で用いられると、その前後の情報を焦点化することが多い。

- (28) “Oh, yes. John Belushi died there, *you know*, after overdoing.” “My.” —S. Seldon, *The Sky Is Falling* (「ああ、そうだ。ジョン・ベルーシはそこで亡くなった。麻薬の打ち過ぎでね」「まあ」)

ここでは、*you know* の後続部分を焦点化している。次例では、*y'know* とともに、*like* を介して、“important” という語についての話し手のこだわりが示されている。

- (29) “I wanted the first words that I said to my son to be important, but I knew they would be okay, *y'know*, *like* almost important. I would think of all the important things an hour later.” —S. Stallone, *Rocky II* (「俺は息子にかけた最初の言葉は意味のあるものにしたかったんだ。でも実際はきっとまあまあという程度のもので、そのう、なんとか大事だと言える程度だろうな。というのも俺ときたら大切なことはいつも1時間後に思いつくたちなんでね」)

文中に現れる *like* は、後で見る観点12とも関連し、後続の言葉が見つからず、時間稼ぎや沈黙を埋めるために用いる用法も多いが、一呼吸置きながら *like* を介して後続要素に焦点を当てる場合が多い。*like* の焦点化と関わる用法について詳しくは、Underhill (1988) を参照されたい。

#### 4.3 談話・会話構造との関わりを考える

本論では「談話」という語は広義で使用しており、談話標識の前後の発話のみならず、発話が行なわれる状況など幅広い文脈を含めている。ただし、以下の観点を議論するにあたっては、あくまで言語表現を伴うものを想定しており、背景的な状況 (situation) とは区別しておきたい。<sup>6</sup> 談話標識はさまざまな談話構造と関わるので、その射程 (scope) との関係から分析の観点を設定する。また、先行研究 (松尾・廣瀬 (2014) 2.) で見たように、談話と同じ概念で会話 (conversation) を大きな単位として認め、会話とどのように関わっているかを考察する必要がある。本論では両者を統合する形で、いくつか

の談話標識の分析的観点を示す。

**観点8 (談話・会話分析的)** 談話標識がどのような単位の談話・会話単位と関わっているかを考察する。具体的には、局所的 (local) な関わりを持つのか、全体的 (global) な関わりを持つのか、談話標識の射程を考察する。

Lenk (1998: 245-256) では、局所的な関わりとは2つの隣接発話間の関係を、全体的な関わりとは談話の異なる部分の関係をいう。談話の異なる部分とは、以前話された話題や逸脱前の話題、当該の会話で触れられていない状況や会話外の (世界の) 知識などである。それぞれの例を示す。(30b) は長々と続く留守番電話のメッセージ、(30c) はある夫婦が離婚の法的手続きについて話している場面である。

- (30) a. Jane: Oh, speaking of work, I am meeting up with some people from the office tonight for a party. You wanna come? Tess: *Actually*, I'm having drinks with some friends from Milan.—27 *Dresses* [映画台本] (「ああ、仕事と言えば、今夜オフィスの仲間が集まってパーティをするのよ。あなたもどう?」「実は、ミラノの友だちと飲みに行くことになってるの」)
- b. “... You're a real star tonight, despite your screw up. *Anyhow*, I'll fill in on it when you get back. Ciao.” —D. Brown, *Deception Point* (「...。ヘマをやらかしたけど、今夜のあなたは本物のスターよ。いずれにせよ、戻って来たら詳しく教えるわ。チャオ」)
- c. “*So anyway*,” she said. “this is what I wanted to tell you: I'm having John Albright send you a letter.” —A. Tyler, *The Accidental Tourist* (「で、とにかく」と彼女は言った。「私があなたに言いたかったのはこういうことよ。ジョン・オルブライトにあなたへ書類を送ってもらうつもりよ」)

(30a)は局所的な関わり、(30b)と(30c)は全体的な関わりを持つ例である。(30a)では「要請と拒否」という隣接部の間で *actually* が用いられており、*actually* によって予め相手の期待とは異なることを述べる合図をして、直接的に断るよりも丁寧な表現になっている。(30b)では一連のメッセージの終結部で *anyhow* が、(30c)では本題に戻る合図として *so anyway* が用いられている。このように、全体的な関わりを持つものとしては、主に話題逸脱の最初や最後の部分で、話題転換や逸脱などを合図する談話標識がよく用

いられる。

**観点 9 (談話・会話分析的)** 談話・会話の開始セクション (opening section)、話題セクション (topic section)、終結セクション (closing section) のうち、談話標識が主にどのセクションと関わる機能を果たすかを考察する。

以下、談話標識が各セクションで用いられる例を示す。(31a) はジョージがジェーンのところにやって来てかけた言葉、(31b) は詐欺師にだまし取られた 100 万ドルの話から話題を転換する場面である。

- (31) a. George: Hey, Jane. *Look. By the way* did you get that thing I left on your desk this morning?—*27 Dresses* [映画台本] (「ねえ、ジェーン。ちょっと。そう言えば、今朝君のデスクに置いといたあれ、見てくれた?」)
- b. “*Incidentally*, Robin, however did you manage to spend \$73.50 on dinner last Wednesday night?” —J. Archer, *Not a Penny More, Not a Penny Less* (「ところでロビン、こないだの水曜の晩の食事にいったいどうやって 73 ドル 50 セントも使ったんだ?」)

(31a) は一連の会話の開始部分で、(31b) は話題セクションのうち話題を展開する箇所です。談話標識が用いられている。上例で見られるように、しばしば呼びかけ語と共起する。終結セクションに関しては、会話を終了する際、謝辞を表す表現に添えられ、文尾で用いられることも多い *anyway* の用法を上げておきたい。

- (32) Julie: You don't know what you're missing. Mitch: Thanks *anyway*.—*The Firm* [映画台本] ([立ち上がって出て行こうとしている相手を見て]「あなたは失いかけているものが何か分かってないのよ」「とにかく、ありがとう」)

**観点 10 (談話・会話分析的)** 談話・会話のやり取りの中で、談話標識が順番取り (turn-taking) とどのように関わるのかを考察する。

具体的には、発言権の獲得、順番依頼 (turn-requesting)、順番保持 (turn-holding [keeping])、順番譲渡 (turn-yielding)、順番放棄 (turn-relinquishing [abandoning])

とどう関わるかを考察する。以下、*so* を例にして考えてみよう。

- (33) a. It was Molly who finally took the initiative. “*So*,” she said, offering her hand. “It’s good to see you again.” —K. Harper, *Falling in Love* (ついに主導権を握ったのはモリーだった。手を差し出しながら「で、またお会いできて嬉しいわ」と言った。)
- b. Mitch had his attention. “*So?*” “So, the two men who died with your son were friends of mine.” —J. Grisham, *The Firm* (ミッチは相手の注意を引くことができた。「それで?」「それで、あなたの息子さんと一緒に亡くなった2人の男は私の友人なんです」)
- c. Jane: Yeah. Never mind. It’s not really your thing. *So, um*, how long you stain’ for?” —*27 Dresses* [映画台本] (「いいわ、気にしないで。興味ないわよね。で、そのう、どれ位ここにいるの?」)
- d. A: and then er it came back at one o’clock er in the afternoon back and forth one a day *so*  
 B: *So* just one a day.—Lam 2009b: 365

(33a) では *so* によって発言権を獲得し、(33b) では *so* によって相手に発言を促して順番依頼をしている。(33c) では話し手は相手の無関心な様子を見て *so* で順番を保持しつつ話題の転換を試みようとしているが、すぐに言葉が見つからず続けて *um* でさらに順番保持をしている。順番保持ではこのほかに、*okay* や *well* がよく用いられる。(33d) では A が *so* で順番を譲渡し、B がそれを引き取って新たに発話を開始している。このように *so* で順番を譲渡する場合、多くは発話の最後で *so* が用いられ、次の話し手が *so* を繰り返す (Lam 2009b: 365)。

なお、順番放棄に関しては、順番譲渡と重複する面があるが、次のような単独で用いられる *whatever* の用法を例として挙げておきたい。

- (34) “We can take these letters and—” “Copy them. Use them. *Whatever.*” —W. Harrington, *Columbo: The Show Game Killer* (「我々がこれらの手紙を持っていければ...」「コピーするなり、利用してくれ。お好きなように」)

(34) では相手が *and* で話を打ち切って順番譲渡しており、それを受けて情報の補足を

行っているが、*whatever* によってその話題を打ち切ってしまいたいという、やや投げやりな態度を示しながら、自分の順番を放棄してしまっていると説明できる。*whatever* に関しては、話し手の態度を表す表現としての理解が重要であるが、同時に会話の順番取りの観点から眺めると、その働きがさらに明らかになる。

以下、観点 9、10 の下位区分になるが、談話・会話の中で、その進行を話し手がどのように調整しているかを合図する機能が見出される。これを談話・会話調整機能として、いくつか分析の観点を示す。

**観点 11 (談話・会話的)** 談話標識がもつばら聞き手の注意を喚起する機能 (attention-getter) を持つかを考察する。

聞き手の注意を喚起する談話標識は、通例、その機能から文頭に現れる。

- (35) a. Emily: Yeah, whoopee. *Now*, it's very important that you do exactly what I'm about to tell you.—*The Devil Wears Prada* [映画台本] (「ええ、すごーい。さてと、これから私が言う通りにすることがすごく大切よ」)
- b. Mitch: I'm very sorry, Lamar. Lamar: *Oh*, uh, by the way, Oliver wanted me to tell you... you shouldn't be burdened with a student loan.—*The Firm* [映画台本] (「本当に気の毒だと思うよ、ラマー」「あっそうだ、えー、ところで、オリバーが君に話してくれって... 学生ローンを負担する必要はない」)

(35a) では *now* で相手の注意を喚起しつつ話題を転換している。(35b) では *oh* で注意喚起をしている。*oh* は通例、予想外の情報に対する反応の合図として用いられるが、その特徴を利用して、ここでは予め話すつもりであった重要な話題をいかにも今思い出したように装って導入している。(31a) の *look* も注意喚起の機能を持つ。このように間投詞的な談話標識や話題転換や導入を合図する談話標識は、しばしば注意喚起の機能をも併せ持つ。<sup>7</sup>

**観点 12 (談話・会話的)** 談話標識が談話・会話の順番を保持するため、あるいは遅らせる [時間稼ぎをする] ため、沈黙を埋める機能 (silence filler) を果たしているかを考察する。

- (36) a. She glance over, unsure how to respond. “*Well...*” She hesitated. “May I assume, sir, that we are not talking about alien spacecrafts or little green men?” —D. Brown, *Deception Point* (彼女は視線を返したが、どう答えたらよいのか分からなかった。「あのう …」彼女は口ごもった。「異星人の宇宙船とか小さな緑の人たちのことを話しているわけでは、大統領、ありませんよね」)
- b. He was eating a nice pork pie, and when the waitress offered him dessert he said. “*Oh, now, let me see, maybe I will try some at that,*” …—A. Tyler, *The Accidental Tourist* (彼はおいしいポークパイを食べていた。するとウェイトレスがデザートを勧めてきたのでこう言った。「ああそうだなあ、はてと、あれを少しもらおうかな」…。)

(36a) では大統領に対して荒唐無稽なことを言いにくいので、とりあえず *well* で間を埋めて言葉を探している。(36b) では注文するデザートを決めかねて3つの談話標識で時間稼ぎをしている。なお、本論において別の議論ですでに挙げた (8)、(10) の例についても、再度参照されたい。

観点 13 (談話・会話分析的) 談話・会話の話題と関わって、どのような機能を果たしているかを考察する。

話題との関連では、新しい話題の導入、部分的な話題の変更 [修正、詳細、具体化、拡張など]、中断した後の話題の再開等を考察することになる。

- (37) a. Jane: Oh, *speaking of* work, I am meeting up with some people from the office tonight for a party. You wanna come?—*27 Dresses* [映画台本] (「ああ、仕事と言えば、今夜オフィスの仲間が集まってパーティをするのよ。あなたもどう?」)
- b. “Yep, he got drunk one night—and *by the way*, the drinking is now in no-man’s-land—so he called and told me he’d made his debut.” —J. Grisham, *The Associate* (「そうだな、ある晩、奴が酔ってさ、ついでに言えば、奴の飲酒は今じゃ荒れ放題の状態だけど、で、電話してきて (俳優として) デビューしたと言ってた」)

(37a) では *speaking of* で新しい話題を導入することを明示している。(37b) では話し手の友人の行動について話している途中で、*by the way* でその友人の飲酒に関する背景情報を挿入している。この発話の主題である友人の行動から逸脱するが、サブトピック的な彼の飲酒の状況の詳細を導入することになる。話題の再開については、(30c) を参照されたい。

**観点 14 (談話・会話分析的)** 談話標識が談話・会話修正とどのように関わっているかを考察する。

具体的には自己修正 (self-repair) と関わるのか、他者修正 (other-repair) に関わるのかを考察し、さらに、どのような方向で修正を行っているのか、すなわち、とちり (非意図的な誤り) の修正なのか、より適切な語句の選択、意味 [程度] を制限する修正なのか等、談話修正という観点から詳細な記述を行うことができる (cf. 廣瀬 1988, 1997)。

- (38) a. Ruby liked the motel, *in fact* she appeared to be quite fond of it.—J. Grisham, *The Street Lawyer* (ルビイはモーテルが気に入っていた。というか、心底大好きなようだった。)
- b. “Really, the only one who can help you is you. *Well*, you and God.” —J. Guest, *Ordinary People* (「本当のこと言って、自分を救えるのは自分よ。いえ、自分と神様よ」)

(38a) では先行部分の “liked” をより適切で強い表現に修正している。(38b) では考え直して前言を正確に言い直している。

#### 4.4 発話態度との関わりを考える

後続する命題内容に対して、話し手が態度表明しながら情報伝達する場合がある。こうした発話態度については、以下のような観点から分析する必要がある。

**観点 15 (発話態度的)** 談話標識が、相手の発話に対して肯定的な態度を示しているのか、否定的な態度を示しているのかを考察する。

話し手の肯定的な態度は、談話標識が応答表現で用いられる様々な例に見られる。分かりやすい例として、くだけた言い方となるが、(of) *course* の例と *please* の単独用法をあげておきたい。

- (39) a. “Is it OK if I have another cup of coffee?” “*Course*, help yourself.” —LD<sup>4</sup>  
 b. “Would you like some more wine?” “Yes, *please*.” —LAAD

なお、*please* の用法では、特に相手に行動を促す場合には *do* を伴う。次の例では *not at all* でまず応じ、その後に *please do* を添えていることに注意。

- (40) Claas said, “Do you mind if we ask you a couple of questions?” “No, not at all. *Please do*.” —S. Grafton, “*O*” *Is for Outlaw* (「2、3 質問していいですか」とクラアスは言った。「いいですとも。さあどうぞお尋ねください」)

他方、(41) では *on the contrary* を応答表現として単独で用い、相手の見解に対する強い否定の態度を示している。

- (41) “Not a problem with one of my gists, I hope.” “*On the contrary*. He says the White House is impressed with your work.” —D. Brown, *Deception Point* (「(電話の内容が) 私の書いた要旨に関する問題でなければいいのですが」「全く逆だ。ホワイトハウスは君の仕事に感心しているそうだ」)

なお、どっちつかずの態度も談話標識に込められ、応答表現に用いられる。その代表選手は、(42a) の “*Well, sort[kind] of*.” で「まあね、ちょっとね」の意となる (cf. 観点 17)。(42b) の *more or less*、(42c) の *so to speak* も、相手に対する同意を示すが、ややあいまいな態度が示唆される。

- (42) a. “Do you like red wine?” “Yes, *kind [sort] of*.” —LDEL<sup>2</sup>  
 b. He said, “Yeah, but what does that boils down to? You sit with somebody and tell him every bad thing?” “*More or less*.” —L. Block, *Out on the Cutting Edge* (「なるほど、でも結局どういうことなんだ? 誰かと席を交え、そいつに悪いことをぶちまけるってことかい?」「そんなところだ」)

- c. “She came back,” he said. “*So to speak*,” I said.—R. Parker, *Thin Air* (「彼女は戻って来たんだね」と彼は言った。「まあそう言えるね」と僕は言った。)

観点 16 (発話態度的) 談話標識が、相手の発話に対して話し手が驚きや喜び、怒り等どのような感情を抱いたことを合図するかを考察する。

間投詞から派生した談話標識は感情的な陳述に伴うことが多く、*well* についても、(43a) のように驚きを表したり、(43b) のように喜びを表す文脈で使用される。

- (43) a. “Joana? Ken.” “*Well*, this is a surprise. I thought you weren’t speaking to us.” —L. Hays, *Columbo#5: Murder By the Book* (「ジョアナかい。ケンだ」「まあ、これは驚きだわ。私達とは話したくないんじゃないかと思っていたわ」)
- b. “I brought you some strudel for your birthday,” she said. “Not apple. It’s nut. The best I ever made. You’re gonna wish you had more.” “*Well*, Rosie, how nice!” —S. Grafton, “*G*” *Is for Gumshoe* (「誕生日プレゼントにシュトルデル〔菓子名〕を持って来たわ」と彼女は言った。「中はリンゴじゃなくて、ナッツよ。最高の出来だわ。もっと食べたくなるわよ」「まあ、ロージー、とっても素敵だわ!」)

こうした間投詞から派生した談話標識以外にも、予想外の状況に出会った際に切り出す言葉には話し手の感情が反映されることが多い。次の *but* も相手の答に対して驚きと強い疑問の念を表している。

- (44) “Did you kill her?” “Kill Suzanne? Are you crazy?” “*But* you were there?” —M. H. Clark, *Let Me Call You Sweetheart* (「彼女を殺したのはあなたですか?」「スザンヌを殺したって? 頭がおかしいんじゃないか?」「でも、現場にはいたんでしょう?」)

ただし、感情を表す機能については、談話標識の二次的な機能として理解しておくべきであろう。もっぱら感情のみを表す *Wow!*, *Shucks!*, *Whoops!* などは、やはり本来的な間投詞として位置づけておくべきである。談話標識と間投詞との関係について詳しくは、Fraser (1999)、Norrick (2009) や Nishikawa (2010) などを参照されたい。

観点 17 (発話態度的) 談話標識が、話し手が受容した情報に対して特別な関心を抱いているのか、あるいは無関心なのか、そのいずれを合図するかを考察する。

(45a) は上司と部下の女性の会話、(45b) は空港のターミナルでのやり取り、(45c) はホテルのフロントでのやり取りである。

(45) a. “How’s Kemal!” Dana hesitated. “At the moment. I’m afraid there’s a problem.” “*Oh?* What kind of problem?” —S. Sheldon, *The Sky Is Falling*  
 (「ケマルは元気かい？」ダナは口ごもった。「目下のところですが。問題があります」「というと？どんな問題なのかな？」)

b. “My name is Dana Evans. I have a—” The clerk looked up. “*Ah!* Miss Evans. Your car is ready.” —*ibid.* (「ダナ・エヴァンスです。(レンタカーの)予約を—」店員が顔を上げた。「ああ、エヴァンスさんね。車の用意はできてますよ」)

c. “I’m Dana Evans. I have a reservation.” The man looked at her a moment and said nervously, “*Ah,* yes. Miss Evans.” —*ibid.* (「ダナ・エヴァンスです。予約をしているのですが」男は一瞬彼女を見つめて、神経質そうに言った。「ああ、はい。エヴァンスさんですね」)

(45a) では上司は部下の答に対して関心を抱き、詳細を知りたがっている。それに対して(45b)と(45c)では客と従業員の通常のやり取りで、客から得た情報は従業員にとっては特段珍しく関心を抱くようなことではない。このことは、*oh* が談話の中で前言とそれを受ける発言とを逆接的に結びつける、つまり予想外の内容を受けて用いられるのに対して、*ah* 順接的に結びつける、つまり(ある程度)話し手の想定内の内容を受けて用いられることに起因している (cf. 内田 2011: 64-68)。

また、次のような談話標識の単独用法では、話し手の無関心さを示している。

(46) “And if they made her stay away, that must mean Marcie is important, right?” I didn’t answer. “Has she some executive position?” “*Sort of.*” “Well, that’s to her credit. She’s a modern girl. Christ, you should be proud. She’s an achiever. Is she bucking for promotion?” “In a way.” “That’s good. Ambitious. That’s to be proud, Oliver.” I nodded. Just to show I wasn’t

sleeping.—E. Segal, *Oliver's Story* (「それにマーシーが家に帰してもらえないんだったら、彼女が重要人物ということじゃないか？」僕は答えなかった。「かの上は重役の地位にあるのかい？」「まあね」「ほう、たいしたものだ。時代の先端に行く女性なんだな。全く誇りに思うべきだよ。彼女は成功者だ。今販売促進のためにがんばっているのかい？」「そんなところです」「すごいな。意欲的なんだな。そりゃ誇りにすべきだよ、オリバー」僕はうなずいた。そうしたのもただ寝ていないことを示したかったからだ。)

(47) は、新しい恋人のマーシーを先妻の父に会わせようとしたが、恋人が仕事の都合で来られなくなり、父がオリバーを慰めている場面である。父がいくらその恋人を持ち上げようとしてもオリバーの心に響かず、話題に乗ってこないことが「気のない返事」によく現れている。次の返答に用いている *in a way* も同様の働きをしていることに注意されたい。

**観点 18 (発話態度的)** 談話標識が、話し手が後続発話を行うことにためらいや控え目な態度を表し、垣根表現 (hedge) として機能しているかを考察する。

(48a) のミッチとエイヴァリは初対面である。(48b) のウィリアムは銀行の次期頭取を目指している。

(48) a. Mitch: I'm sorry. Can I help you? Avery: *Actually* I think I'm here to help you. I'm Avery Tolar, your designated mentor.—*The Firm* [映画台本] ([自分のオフィスの入り口に立っている男を見て]「すみません。何かご用でしょうか?」「実は、君の力になろうと思って来たのだが。私はエイヴァリ・トラ、君の担当教官だ」)

b. “What's that?” said William, trying not to sound anxious. “*Well*, between you and me, the other vice-chairman, Ted Leach, was rather expecting to be appointed chairman himself.” —J. Archer, *Kane and Abel* (「どうしたんです?」ウィリアムは平静を装いながら尋ねた。「あのう、ここだけの話ですが、もう1人の副頭取のテッド・リーチが、自分が頭取に任命されるものだと思っていたのです」)

(48a) では初対面の相手に突然 “I’m here to help you.” と言ったのでは失礼なので、*actually* で相手にとって予想外のことを言うことを合図して控えめな態度を示している。同じく垣根表現の *I think* と共起していることに注意されたい。(48b) では、*well* でこれから相手にとって良くない内容を伝えることに対するためらいの気持ちが表される。“between you and me” にも注意されたい。なお、垣根表現については、観点2を参照されたい。

#### 4.5 対人関係との関わりを考える

最後に、談話標識はポライトネスと関わって機能する場合があるので、相手との対人関係を考慮しなければならない。なお、観点2も合わせて参照されたい。

観点19 (対人関係的) 談話標識が、聞き手の「面子」(face) を立てる機能を果たすかを考察する。

「面子」(face) という概念は、Brown & Levinson (1978 / 1987) によるが、相手に対する配慮を示して、敬意や尊敬を込めて談話標識が選択されることがある。if節を用いた一連のレキシカル・フレイズは、ポライトネスと関わっていることが多い。以下、少しそのバリエーションを示しておく。それぞれ文尾に添えられることが多いが、文頭にくることも可能で、ポライトネスの度合いに関しては、予め相手に断ってから自らの申し出や意向を述べる形になるので、(49b, d) のように文頭にくる方がより丁寧になる。

(49) a. I’ll take him to the hospital, *if you like*.—MED<sup>2</sup>

b. “I’m Danny’s dad. *If you would like*, we could have breakfast in the morning.” —E. Segal, *The Class* (「ダニーの父親です。もしよければ朝食を一緒にどうですか」)

c. Spell it for me, *if you please*.—LAAD

d. “*If you don’t mind*, Mrs. Rinaldi, I’d like to take a look.” —E. Segal, *Only Love* (「お許し願えれば、リナルディさん、ちょっと拝見させてください」)

観点20 (対人関係的) 談話標識が、話し手の自己防衛的な機能を果たすかを考察する。

次例は、舞台女優になりたい女性が自宅を訪ねて来た監督に言う言葉である。

- (50) “Oh—Hello. I didn’t know you were here. *I mean*—you’re early.” —S. Sheldon, *The Sands of Time* (「あら、こんにちは。お見えになっているとは知りませんでしたわ。いえ、早くおいでになったんですね」)

ここでは、話し手が先行の発言が相手に対して失礼になると考えたのと同時に、相手を出迎えなかった非礼に対する自己防御的な気持ちから *I mean* を用いている。後続の発話では主語を I から you に切り替えていることにも注意。

自分の陳述に制限を加えることを合図する談話標識も、表現の正確さを示すとともに、背後に相手からの批判を避けようとする自己防衛的な心理が働いていることが多い。談話修正に用いられる *anyway* についても、しばしば自己防衛的な心理が働く。

- (51) “If you were going by appearances and if you were up against the two of them, you would take Kenan out first. Or try to, *anyway*.” —L. Block, *A Walk among the Tombstones* (「君がもし容姿で選ぶとして、2人に向かい合ったら、まずキーナンを選ぶだろうね。そうしようとするよ、少なくともね」)

(51) においても、容姿で相手を選ぶことを断定的に述べると相手から反論されかねないので、*anyway* を付して前言に対して制限を加えており、自己防衛的な心理が窺える。

#### 4.6 その他の語法・文法的な観点

以上は機能レベルからの観点であったが、談話標識の実態を明らかにするためには、以下のような観点からの特徴付けも補足的に必要である。

①文の種類（平叙文、疑問文、感嘆文、命令文）とどのような関係があるか。

談話標識は文形式というより、観点3で示したように、発話行為の種類との共起を考察することが重要であるが、一般的な文の種類との共起関係を探っていくことにより、その特徴が見いだせることもある。以下に示すように、談話標識が平叙文で用いられるのは当然のことであるが、談話標識の性質によって他の種類の文（発話）でも用いられる。

- (52) a. *First* cook the onions, *then* add the mushrooms.—*OALD*<sup>7</sup>  
b. “They won’t even discuss the problem.” “*But* how stupid!” —*LD*<sup>4</sup>  
c. “What if they went seaward, what if they went south?” “*But* where?” —T.

Clancy, *Patriot Games* (「海に向かったとしたら？南へ行ったとしたら？」「でも一体どこへ？」)

d. Anne: *So*, then it's tomorrow at noon, is it, Mrs. Harris?—*Anne of Green Gables—the Sequels* [映画台本] (「じゃあ、明日のお昼ということですね、ハリスさん？」)

(52a) では順序を表す *first*, *then* が命令文で、(52b) では強い感情を表す *but* が感嘆文で、(52c) では先行発話の内容に対する疑念を表す *but* が疑問文で、(52d) では推論結果を表す *so* が付加疑問文で用いられている。(52d) は主部と付加部の極性が一致する *matching tag* と呼ばれるものであるが、これに関しては松尾 (1995) を参照されたい。

②一般に談話標識は選択的であるが、使用が義務的な統語環境 (文脈) はないか。逆に、生じると非文となるのはどのような統語環境 (文脈) か。

「用いられない」環境を論じるのは特に非母語話者にとっては困難であり、本論においても先行研究の成果を援用してきたが、理論言語学において実践されてきたように、非文を分析することによって文法性を明らかにすることができる。以下、興味深い例を若干上げておこう。まず、文中の位置に関する制限がある場合の例を見てみよう。

(53) a. *Anyway*, I want to get back to our initial topic.

b. <sup>?</sup>I, *anyway*, want to get back to our initial topic.

c. <sup>?</sup>I want to get back to our initial topic, *anyway*.—以上、Fraser 1988: 24

本題や先に出た話題に戻る場合に用いられる *anyway* は文頭で用いられ、文中や文尾では容認度が下がる。話題の転換や導入を含めて談話の構成を合図する談話標識は、最も目立ちやすい場所、すなわち文頭で用いられるのが一般的である。

次の *like* については、位置についても比較的自由に現れ、その統語的特徴を見いだすことが難しい談話標識の1つであるが、談話標識の機能自体から生じる制限があり、現れにくい統語環境が見いだせる。また、*actually* の用法についても、非文を吟味することによって、その中心的な機能がより明らかとなる。

(54) a. Peter: What's your name?

Mary: \*My name is *like* Mary.—Andersen 1998: 166

b. \**Like*, pick up that piece of paper immediately.—*ibid.*: 167

(55) Eva: Here's your birthday present.

Bob: \**Actually*, it's quite nice.—Schourup & Waida 1988: 142

*like* はしばしば話し手の確信のなさを示唆するので、(54a) のように疑いの余地のない内容を表す場合には通例用いられない。また、基本的に確信が持てない陳述を導くので、(54b) のように即座に行動することを促す命令文では通例用いられない。相手の予想や期待に反することを述べることを合図する *actually* は、(55) のように期待通りの発話に添えることはできない (Alexander 1988: 17)。

#### ③ 談話標識の反復を含め、他の談話標識との共起関係はどうか。

この問題については、本論の各観点で、必要に応じてすでに記述してきたが、*and* を例にとると、*moreover*, *besides* などと共起することで *and* の付加の意味が、*yet*, *still* などと共起することで対比や譲歩の意味が補強される。また、*anyway* と共起することで *anyway* の先行発話の内容を説明したり正当化する「さらに、そのうえ」の意が、*in fact* の先行発話の内容を強調したり補強する「(予想・予定通り) 本当に」の意が明確になる。一方で *but* と共起すると、*anyway* の譲歩を表す「(それでも) とにかく、いずれにしても」の意が、*in fact* の前言の内容に反する主張を表す「ところが実際は」の意が明確になる。

談話標識全体を扱った Fraser (1990, 1999) においても、この談話標識の共起関係は、残された大きな課題の1つとして言及されている。

#### ④ 類似の意味合いを持つ談話標識がどのように使い分けられるか。

非母語話者にとっては類義語の使い分けを理解するのは困難であるが、使い分けが明確になれば英語教育で活用することができる。

(56) A: Where did he go?

B: *But* / \**However*, why do you want to know?—Fraser 2006b: 82

(57) a. It's more expensive to travel on Friday, *so* I'll leave on Thursday.

b. It's more expensive to travel on Friday. \**Then* I'll leave on Thursday.

c. "It's more expensive to travel on Friday." "*Then* / *So* I'll leave on Thursday.

*but* と *however* について、(56) のように質問に対する応答で *however* は用いられない。*so* と *then* について、同一話者の発話内で自分の発言を根拠に推論結果を述べる場合に (57a, b) のように、*so* は可能だが *then* は用いられない。一方 (57c) のように、先行部と後続部の話し手が異なればいずれも用いることができる (cf. 松尾 2013b)。

Schourup (2001: 1033-1034) では、*Well?* と他の表現を比較し、*Well?* の方が *Yes?* や *Huh?* よりも相手に強く発話を促すとしている。また、*And?* についても、*Well?* ほど押しつけは強くないとしている。さらに、*So?* と *Well?* と比較し、以下の興味深い例を示している。

(58) A: I leaned three new words today. [pause] B: *So?* / *Well?*

—Schourup 2001: 1034

前者では、その結果を尋ねることになるが、後者では学んだ3語を述べるように求めていることを示唆すると述べている。

また、音調的な使い分けもある。*like* と *kind [sort] of* はともに話し手の確信のなさを示す談話標識として機能するが、通例、*kind [sort] of* は否定文の焦点となり、強勢を受けることが可能であるが、*like* は不可となる。

(59) a. Peter : You were sort of drunk last night weren't you?

Mary : I wasn't *SORT OF* drunk. I was DRUNK.

b. Peter : You were like drunk last night weren't you?

Mary : \*I wasn't *LIKE* drunk but DRUNK.

—以上、Andersen 1998: 164-165

コーパス言語学の発展に伴って、国内外の辞書においてシノニム記述が充実してきたが、談話標識のシノニム記述については、今後の大きな課題となろう。

#### 4.7 まとめ

以上、談話標識を分析していくにあたっての20の観点と、補足的に文法・語法的な分析の観点をいくつか示した。それぞれの観定の解説にあたっては、分かりやすいものに

するために、適宜、典型的な談話標識を選択した。したがって、取り扱った談話標識を項目別にみると、同じ談話標識がいくつかの観点の用例に現れており、このことは1つの談話標識が多機能であることを改めて示していると言える。しかしながら、多くの観点を提示したために、かえって混乱を招いたかもしれない。本論の目的は、談話標識の実践面の研究として、談話標識をどのように分析していけばよいのかを、具体例と共に示すことであったが、松尾・廣瀬 (2014) と併せて、英語談話標識の諸相を巡る論考を締めくくるにあたって、あえてもう一度原点に戻って「談話標識」そのものについて考えておきたい。

## 5. 談話標識とは何か—再び原点に戻って

談話標識が捉えにくかったのは、やはり名称そのものにも原因があるように思われる。単純に考えれば、「談話標識」(discourse markers) というのは「談話」(discourse) + 「標識」(markers) ということである。ここでまず問題となるのは、「談話」という概念である。言語の構成単位の1つとして、「語<句<節<文<文を越える文脈」といった流れの中で捉えると、「談話」は複数の文から構成されるテキスト(text)だけに言及した用語となるが、松尾・廣瀬 (2014) 及び本論において指摘したように、談話を広義に解釈し、文を越える様々な要素を考慮するというのであれば、事情が違ってくる。言語化された文脈のみならず、談話の生産に関わる話し手、それを解釈する聞き手、さらに発話される状況のすべてを含むとなると、その意味が大きく変わる。広義に「談話」を解釈すると、談話標識は語用論的要素すべてをカバーする用語となる。このようなことから、談話標識は様々なアプローチから研究され、その分析対象となる言語表現の範囲も広がっていき、研究が進むにつれてますます一般化することが難しくなっていくのである。

また、「標識」(marker) というのは、どのように理解しておけばよいのであろうか。OALD<sup>8</sup>では“marker”を「あるものが存在している、あるいは、それがどのようなものであるかを示す合図」(a sign that sth exists or that shows what it is like) と定義している。しかしながら、「談話」を冠した場合には「談話を表す標識」という意ではなく、むしろ「談話的な特徴を持つ[示す]標識」の意を表す。したがって、その談話的な特徴が問われ、“a marker of [for] what?”の追求が必要となる。そして、このwhatの内容として、様々な観点からの談話的機能を明らかにしなければならないのである。言い換えると、このwhatの解釈によって談話標識の定義が変わってくることになると思われる。

談話標識として扱われる言語表現は「何か」を明示的に示している、あるいは暗示的

に「何か」を合図している、といったように広範囲のものを含む。この「何か」を巡って談話標識研究が進められ、松尾・廣瀬（2014）でまとめたように、談話標識の先行研究は大きく2つに別れる。談話標識をテキストとして談話を結びつけるものであると規定する首尾一貫性に基づく考え方（coherence-based）と、認知基盤の考え方（cognition-based）である。後者は関連性理論において収斂されつつあり、談話標識は他の言語表現と同じく最適の関連性（optimal relevance）を保証する言語表現であり、言語学的意味としては、命題内容を構成する要素ではなく、もっぱら手続的意味（procedural meaning）を表す言語表現であるという結論に至っているのである。

筆者の立場として、全面的にある特定の言語理論に立脚する立場は取らないが、一連の先行研究を踏まえて、幅広くコミュニケーションの観点から、談話標識の本質を以下のように集約しておきたい。

「談話標識」（discourse markers）は、言語コミュニケーションに従事する話し手のコミュニケーション活動への貢献の一部として、伝達する発話メッセージ [命題内容] の周辺に位置し、聞き手がその発話メッセージを正しく理解するように（意識的、あるいは無意識的に）その意味解釈の仕方を合図する。そして、それを合図するにあたり、談話的志向性（discourse orientation）を兼ね備えており、文脈に応じて話し手の態度表明・感情表出、情報価値、談話構造、対人関係等に意識を向けさせる言語表現である。

上記の記述の中で用いた「談話的志向性」（discourse orientation）というのは、Aijmer（2013: 12-13）の言う“meaning potential”という考え方に近い。Aijmerは、談話標識は固定された意味や機能を安定的に保持しているというよりは、実際に使用された文脈との相互作用でその実体が浮き彫りになっていくような言語表現と捉え、「談話志向性」を持ち、常にその用いられた文脈と絡み合って重要な役割を果たすと考えている。<sup>8</sup> この捉えにくい「談話志向性」あるいは“meaning potential”を可能な限り抽出できるよう、予め談話標識分析の道具立てを揃えておくというのが、本論の試みであった。

## 6. おわりに—談話標識研究の将来

松尾・廣瀬（2014）及び本論を通して改めて明らかになった談話標識の特徴は、ひと言でいうと、その多種多様性であった。このことは特に驚くべきことではなく、談話標識が広くコミュニケーションの場において機能していることを考えると、当然の結果で

あろう。むしろ、こうした多種多様性を前提とした上で、談話標識に向き合うことが重要である。

談話標識と称される表現の意義については、言語の基本的な機能に立ち戻り、「言語は人間が外界世界を切り取る手段である」と考えると、世界の切り取り方が談話標識によって合図されると言える。また、その切り取りは言語の使用者の主観で行われるので、主観的な部分が談話標識によって示されると言えよう。このように、周辺のなものに見られがちな談話標識は、言語の本質的な部分とも深い関わりがあり、関連性理論の研究に見られるように、談話標識研究を通して言語の本質に迫ることができる。

本論で示した分析の観点は、いずれも談話標識を体系的により高いレベルで質的研究を進めていくためのものである。量的研究については、IT 機器の発達と普及により、多くの資料を容易に収集することが可能になった。問題は、得られた資料からどのような一般化を行うかということであり、この作業は時代が変わっても研究者の手に委ねられている。個々の例について文脈を正確に読みとり、本論で示したいずれの観点を適用するかは、「研究者の眼」にかかっている。本論で示した 20 の観点については、さらに吟味が必要となろう。あるいは、談話標識の特徴を明確にするためにさらに新たな観点を設定する必要があるかもしれない。

談話標識の今後の研究の方向性としては、大きく 2 つの方向性が考えられる。個別の談話標識に焦点を当て、徹底的な記述を目指す方向性と、1 つの共通する機能から複数の談話標識を見渡し、それぞれが果たす役割の相違にも注意しながら体系化を図っていく研究の方向性である。両者は相補的な関係にあり、いずれも重要な研究であるが、前者の研究については、これまでの語法研究等で着実に積み上げられてきており、今後、特に補足的な観点として 4.6 で示した②と③を明らかにするために、後者の方向性からの研究に期待したい。

なお、本論で示した談話標識の分析方法以外に、言語習得 [Hellermann & Vergun 2007; Lam 2009a; Polat 2011, etc.]、会話の参加者の役割や関係による使われ方の変化 [Fuller 2003, etc.]、発話産出と理解における談話標識の機能 [Han 2011, etc.] などの観点もある。特に、外国語として英語を学ぶ日本人にとって、談話標識をどのように教え、どのように習得するか、母語である日本語が談話標識の使用に与える影響など、教育的見地からの研究が重要である。さらに、翻訳などを利用した対照言語学的観点も興味深い。談話標識に関する議論は尽きない。

最後に、筆者と同様に過去約 30 年間に渡って談話標識研究に取り組んできた Schiffrin (2001 / 2004: 67) から 2 つの引用を示して、松尾・廣瀬 (2014) 及び本論の

まとめとしたい。談話標識研究の意義と将来の研究の在り方をもの見事に集約し、同様の趣旨に辿りついた筆者の思いを代弁してくれている。

Discourse markers tells us not only about the linguistic properties (e.g. semantic and pragmatic meanings, source, functions) of a set of frequently used expressions, and the organization of social interactions and situations in which they are used, but also about the cognitive, expressive, social, and textual competence of those who use them. Because the functions of markers are so broad, any and all analyses of markers – even those focusing on only a relatively narrow aspect of their meaning or a small portion of their uses – can teach us something about their role in discourse. (談話標識によって、頻繁に用いられる一連の表現の言語的特徴 [すなわち、意味論的意味、語用論的意味、語源、機能] やそれらの表現が用いられる社会的相互作用や状況の構成が明らかになる。そればかりか、談話標識の使用者の認知的、表出的、社会的そしてテキスト構成上の能力も明らかになる。談話標識の機能は非常に広範囲に渡るので、いかなる分析であろうと全ての分析で一談話標識の意味の比較的狭い側面や使用法のごく一部のみに焦点を当てた分析においてさえ一談話標識の談話における役割が何かしら提示される可能性がある。)

If interest in discourse markers continues over the next 10 years, then, perhaps we will see an even broader empirical base from which to build an integrative theory. And perhaps this base will be built not only through analyses that continue to focus on specific markers, their uses, and / or their contexts, but also through analyses of other topics in discourse analysis that can be illuminated by incorporating discourse markers into the set of basic tools through which we (as speaker / hearers *and* linguists) understand discourse. (談話標識に対する関心がこれから10年間に渡って継続するならば、統合的な理論の構築につながるようなより広がりのある実証的な基盤を得ることになるだろう。そしてこの基盤は、今後も特定の談話標識やその用法と / あるいは用いられる文脈に焦点を当てる分析のみならず、談話分析の他のトピックに関する分析を通して、築かれることになるだろう。それらのトピックは、談話標識を(話し手 / 聞き手であり、かつ言語学者である) 私達が談話を理解する際に用いる基本的な道具に組み入れることによって解き明かすことが出来る。)

\*本論は、基本的な談話標識を見出し語として 43 項目、関連語句と合わせると約 100 項目の用法を記述した『英語談話標識用法辞典』(2015 年 10 月刊行予定)の基盤となる論考で、Appendix 2, 3 に収録される「談話標識についての基本的な考え方」及び「談話標識の機能的分類」を精緻化・詳細化したものである。

## 注

- 1 ここで用いたレキシカル・フレイズ自体、談話標識と同様に、様々な形式のものが含まれ、その文法的な位置づけについて統一見解がない。また、当然のことであるが、レキシカル・フレイズの中には、意味が固定されたものがあり、すべてのレキシカル・フレイズを談話標識と位置づけることはできない。
- 2 この他、感嘆的な音調を伴って繰り返して用い、「おやおや」の意で、事ありげな態度や、好奇心を抱いていることを表したり、後に長めのポーズを伴って会話の打ち切りを示す場合があることも指摘されている (Ball 1986: 118) : *Well, well! Talk of the devil! Look who's here! / Well — now I must be on my way. So long!*  
さらに、Aijmer (2013: 33-34) によると、母音を発音せず速く発話すると話し手の苛立ちが表されることがあり、自分の話す順番であることを示したり、新たな話題を導入するような場合には *well* の後にしばしばポーズが置かれるという指摘もある。
- 3 *variational pragmatics* (言語変種語用論) の立場から談話標識を考察した Aijmer (2013) が参考になる。従来あまり視野に入れられていなかった談話の形 (対話かモノログか)、私的な場か公的な場か、伝達様式 (対面か電話の会話か) といった要因と談話標識の使われ方の関係を論じているが、この立場からの更なる研究が期待される。
- 4 Jucker & Ziv (1998: 4) においても、以下のように機能的特徴を述べている: *The different studies of discourse markers distinguish several domains where they may be functional, in which are included textual, attitudinal, cognitive and interactional parameters.* (斜字は筆者) 本論では、関連性理論等で用いられる幅広い用語と区別し、*cognitive* という用語は避け、*information function* を機能的特徴の 1 つとして認めている。
- 5 Halliday (1985 / 1994<sup>2</sup>) では、敷衍 (*elaboration*)、拡張 (*extension*)、強化 (*enhancement*) の 3 つのカテゴリーを設け、それぞれを細分化している。他方、Quirk et al. (1985) では、共立詞 (*conjuncts*) の分類として、*listing, summative, appositive, resultative, inferential, contrastive, transitional* 等をあげ、さらにそれ

ぞれの下位区分を示している。

- 6 談話標識には、言語化された先行文脈（発話）ではなく、発話の場で確認できる状況や話し手がすでに持っている想定などを受けて用いられるものもある。たとえば、財布に5ドル札が残っているのを見て“*So I didn't spend all the money.*” (Blakemore 2002: 166) と言うような場合である。
- 7 もっぱら注意喚起の働きを持つカテゴリーとして呼びかけ語 (vocative) があるが、これらについても、単なる呼びかけではなく、その使用によって相手との心理的距離の調節を図ろうとする語用論的機能もあり興味深い。本論では談話標識としては扱わない (cf. Fraser 1999: 149)。
- 8 Aijmer (2013: 149) においては、pragmatic markers という名称を用いているが、以下の様にその本質を集約している: Pragmatic markers do not have a stable meaning but a meaning potential, that is, a rich meaning representation where the meanings are related to each other in different ways. By studying the markers in many different text types and activities and with different speakers we can get a better picture of what the potential functions, sub-senses, and collocations are, how they are derived from core meanings and of the role of the literal meaning. なお、Aijmer のこうした考え方は Norén and Linell (2007) に基づいており、詳しくは、Norén and Linell (2007) も参照されたい。

ただし、注3で示した Aijmer (2013) の variational pragmatic approach では、社会言語学的な文脈・状況そのものに重点が置かれ、その特徴によってどのような用法が多く現れるかを明らかにすることができる。しかし、そもそもどのような働きをするのかについては、各項目が持つ働きが前提となっていたり、それぞれの具体的な文脈や状況から直観的に導かなければならない。

#### 参考文献

- Aijmer, K. 1989 / 1996. *Conversational Routines in English: Convention and Creativity*. London: Longman.
- , 1997. 'I think — an English modal particle.' In T. Swan and O. J. Westvik (eds.), *Modality in Germanic Languages: Historical and Comparative Perspectives*. Berlin: Mouton de Gruyter. 1-47.
- , 2002. *English Discourse particles: Evidence from a corpus*. Studies in Corpus Linguistics. Amsterdam: John Benjamins.

- 2011. 'Well I'm not sure I think...: The use of *well* by non-native speakers.' *International Journal of Corpus Linguistics* 16 (2), 231-254.
- 2013. *Understanding Pragmatic Markers: A Variational Pragmatic Approach*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Aijmer, K., A. Foolen and A-M. Simon-Vandenberg. 2006. 'Pragmatic markers in translation: a methodological proposal.' In K. Fisher (ed.), *Approaches to Discourse Particles*. Amsterdam / Tokyo: Elsevier. 101-114.
- Alexander, L. G. 1988. *Longman English Grammar*. London: Longman.
- Andersen, G. 1998. 'The pragmatic marker *like* from a relevance-theoretic perspective.' In A. H. Jucker and Y. Ziv (eds.), *Discourse Markers: Descriptions and Theory*. P&B ns.57. Amsterdam: John Benjamins. 140-170.
- 2000. 'The role of the pragmatic marker *like* in utterance interpretation.' In G. Andersen and T. Fretheim (eds.), *Pragmatic Markers and Propositional Attitude*. P&B ns.79. Amsterdam: John Benjamins. 17-38.
- 2001. *Pragmatic Markers and Sociolinguistic Variation: A Relevance-Theoretic Approach to the Language of Adolescents*. P&B ns.84. Amsterdam: John Benjamins.
- Ball, W. J. 1986. *Dictionary of Link Words in English Discourse*. New York: Macmillan.
- Bell, D. M. 2010. '*Nevertheless, still* and *yet*: Concessive cancellative discourse markers.' *Journal of Pragmatics* 42, 1912-1917.
- Biber, D., S. Johanson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- 1992. *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell.
- 1993. 'The relevance of reformulations.' *Language and Literature* 2 (2), 101-120.
- 1994. 'Relevance, poetic effects and social goals: a reply to Culpeper.' *Language and Literature* 3 (1), 49-59.
- 1995. 'Relevance Theory.' In J. Verschuren et al. *Handbook of Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins. 443-452.
- 1996. 'Are Apposition Markers Discourse Markers?' *Journal of Linguistics* 32,

325-347.

- 1998. 'The context for so-called "discourse markers".' In K. Malmkjær and J. Williams (eds.), *Context in language learning and language understanding*. Oxford: Cambridge University Press. 44-59.
- 2000. 'Indicators and Procedures: *Nevertheless* and *But*.' *Journal of Linguistics* 36, 463-486.
- 2002. *Relevance and Linguistic Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blass, R. 1990. *Relevance Relations in Discourse: A Study with Special Reference to Sissala*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bolinger, D. 1989. *Intonation and Its Uses: Melody in Grammar and Discourse*. Stanford: Stanford University Press.
- Brinton, L. J. 1996. *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 2010. 'Discourse markers.' In A. Jucker and I. Taavistsainen (eds.), *Historical Pragmatics*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter. 285-314.
- Brockway, D. 1981. 'Semantic constraints on relevance.' In P. Herman, M. Sbisà and J. Verchueren (eds.), *Possibilities and Limitations of Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins. 57-78.
- Brown, P. and S. C. Levinson. 1978 / 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bublitz, W. and N. R. Norrick (eds.). 2011. *Foundations of Pragmatics*. Berlin / Boston: Mouton de Gruyter.
- Carston, R. and S. Uchida. 1998. *Relevance theory: applications and implications*. P&B ns.37. Amsterdam: John Benjamins.
- Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman. 1999<sup>2</sup>. *The Grammar Book*. Rowley, Mass.: Newbury House.
- Chalker, S. 1984. *Current English Grammar*. London: Macmillan.
- Cuenca, M. J. 2008. 'Pragmatic markers in contrast: The case of well.' *Journal of Pragmatics* 40, 1317-1391.
- Ferrara, K. W. 1997. 'Form and function of the discourse marker *anyway*: Implications for discourse analysis.' *Lingua* 35, 343-378.

- Fischer, K. 2000. *From Cognitive Semantics to Lexical Pragmatics: The Functional Polysemy of Discourse Particles*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- . (ed.). 2006. *Approaches to Discourse Particles*. Studies in Pragmatics 1. Amsterdam / Tokyo: Elsevier.
- Fraser, B. 1988. 'Types of English Discourse Markers.' *Acta Linguistica Hungarica* 38 (1-4), 19-33.
- . 1990. 'An approach to discourse markers.' *Journal of Pragmatics* 14, 383-395.
- . 1996. 'Pragmatic markers.' *Pragmatics* 6 (2), 167-190.
- . 1999. 'What are discourse markers?' *Journal of Pragmatics* 31, 931-952.
- . 2006a. 'Towards A Theory of Discourse Markers.' In K. Fischer (ed.), *Approaches to Discourse Particles*. Studies in Pragmatics Series 1. Amsterdam / Tokyo: Elsevier. 189-204.
- . 2006b. 'On the universality of discourse markers.' In K. Ajimer and A.-M. Simon-Vandenberg (eds.), *Pragmatic Markers in Contrast*. Studies in Pragmatics Series 2. Amsterdam: Elsevier. 73-92.
- . 2009. 'Topic Orientation Markers.' *Journal of Pragmatics* 41, 892-898.
- Fuller, J. M. 2003. 'The influence of speaker roles on discourse marker use.' *Journal of Pragmatics* 35, 23-45.
- Garner, B. A. 2000. *The Oxford Dictionary of American Usage and Style*. Oxford: Oxford University Press.
- Goffman, E. 1974. *Frame Analysis*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.
- Grice, H. P. 1975. 'Logic and Conversation.' In P. Cole and J. L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics 3, Speech Acts*. New York: Academic Press. 41-58. reprinted in Grice, H.P. (1989), 22-57.
- . 1989. *Studies in the way of words*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.
- Halliday, M. A. K. 1985 / 1994<sup>2</sup>. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Arnold.
- Halliday, M. A. K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Han, D. 2011. 'Utterance production and interpretation: A discourse-pragmatic study on pragmatic markers in English public speeches.' *Journal of Pragmatics* 43, 2776-2794.
- Hellermann, J. and A. Vergun. 2007. 'Language which is not taught: The discourse

- marker use of beginning about learners of English.’ *Journal of Pragmatics* 39, 157-179.
- 廣瀬 浩三. 1986. 「談話現象の記述に向けて」『島根大学法文学部紀要文学科編』9 (2), 1-25. 島根大学法文学部文学科.
- 一. 1988. 「英語の談話修正表現について」六甲英語学研究会 (編)『現代の言語研究』263-274. 金星堂.
- 一. 1989. 「談話辞 *anyway* の分析」『語法研究と英語教育』11, 29-38. 山口書店.
- 一. 1993. 「談話方策の一端を担う like」衣笠・赤野・内田 (編)『英語基礎語彙の文法』214-223. 英宝社.
- 一. 1997. 「“Love Means Never Having to Say “What do you mean?” —英語におけるメタ言語的活動の諸相 (1) —」島根大学法文学部紀要『島大言語文化』4, 41-74. 島根大学法文学部.
- 一. 1998. 「メタ言語的観点から見た英語表現について」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会 (編)『現代英語の語法と文法』287-295. 大修館書店.
- 一. 2000. 「語法研究の立場から見た談話標識」『英語語法文法研究』7, 35-50. 英語語法文法学会.
- 一. 2001. 「談話の展開を促す談話標識」『英語青年』Vol.CXLVII, No.7, 466-467. 研究社.
- 一. 2003. 「関連性理論から見た談話標識」島根大学法文学部紀要『島大言語文化』14, 1-45. 島根大学法文学部.
- 一. 2008. 「レキシカルフレイズの語法」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第3号, 97-110. 島根大学外国語教育センター.
- 一. 2012. 「談話標識を巡って」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第7号, 1-28. 島根大学外国語教育センター.
- 一. 2014. 「談話標識を再考する」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第8号, 1-28. 島根大学外国語教育センター.
- Holmes, J. 1995. *Women, men and politeness*. London: Longman.
- Ifantidou-Trouki, E. 1992. ‘Sentential adverbs and relevance.’ *Lingua* 90, 69-90.
- 今井邦彦. 2011. 『語用論への招待』東京: 大修館.
- James, D. 1973. *The Syntax and Semantics of Some English Interjections*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Michigan.
- Jucker, A. H. 1993. ‘The discourse marker *well*: A relevance-theoretical account.’ *Journal of Pragmatics* 19 (5), 435-452.

- Jucker, A. H. (ed.). 1995. *Historical Pragmatics. Pragmatic Developments in the History of English*. P&B ns. 35. Amsterdam: John Benjamins.
- . 1997. 'The discourse marker *well* in the history of English.' *English Language and Linguistics* 1 (1), 91-110.
- Jucker, A. H. and S. W. Smith. 1998. 'And people just you know "wow": Discourse Markers as Negotiating Strategies.' In A. H. Jucker and Y. Ziv (eds.), *Discourse Markers: Description and Theory*. P&B ns.57. Amsterdam: John Benjamins. 171-201.
- Jucker, A. H. and Y. Ziv (eds.). 1998. *Discourse Markers: Description and Theory*. P&B ns.57. Amsterdam: John Benjamins.
- Lakoff, R. 1973. 'Questionable answers and answerable questions.' In B. R. Kachru, B. Less, Y. Malkiel et al. (eds.), *Issues in Honor of Henry and Renée Kahane*. Urbana: University of Illinois. 453-467.
- Lam, P. W. Y. 2009a. 'Discourse Particles in Corpus Data and Textbooks: The Case of *well*.' *Applied Linguistics* 31 (2), 260-281.
- . 2009b. 'The effect of text type on the use of *so* as a discourse particle.' *Discourse Studies* 11 (3), 353-372.
- Leech, G., B. Cruickshank and R. Ivanič. 2001. *An A-Z of English Grammar and Usage*. London: Longman.
- Lenk, U. 1998. *Marking Discourse Coherence: Functions of Discourse Markers in English*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. New York: Cambridge University Press.
- Malinowski, B. 1923. 'The problem of meaning in primitive languages.' In C. K. Ogden and I. A. Richards (eds.), *The Meaning of Meaning*. London: Routledge and Kegan Paul. 296-336.
- 松尾文子. 1989. 「Discourse Marker の一考察 (1)」『英米文学研究』25, 119-131. 梅光女学院大学英米文学会.
- . 1990. 「Discourse Marker の一考察 (2)」『英米文学研究』26, 137-147. 梅光女学院大学英米文学会.
- . 1991. 「Discourse Marker の一考察 (3)」『英米文学研究』27, 139-148. 梅光女学院大学英米文学会.
- . 1993. 「談話接続語としての *so*」衣笠・赤野・内田 (編)『英語基礎語彙の文法』

- 191-202. 英宝社 .
- 一. 1994. 「推論を表す接続語 then について」『語法研究と英語教育』16, 50-58. 山口書店 .
  - 一. 1995. 「2種類の付加疑問文—Matching tag を中心に」『英語語法文法研究』2, 156-166. 英語語法文法学会 .
  - 一. 1997. 「推論を表すつなぎ語 so と then」『英語語法文法研究』4, 135-147. 英語語法文法学会 .
  - 一. 1998. 「推論的応答で用いられる then の用法」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会 (編) 『現代英語の語法と文法』296-304. 大修館書店 .
  - 一. 2000a. 「談話接続語 but の機能」『英語語法文法研究』7, 51-62. 英語語法文法学会 .
  - 一. 2000b. 「談話管理の機能を持つ接続語」『英米文学研究』36, 203-222. 梅光女学院大学英米文学会 .
  - 一. 2001a. 「間投詞的な機能を持つ接続語」『英語表現研究』18, 19-27. 日本英語表現学会 .
  - 一. 2001b. ‘*But and ga, demo.*’ 『英米文学研究』37, 19-31. 梅光女学院大学英米文学会 .
  - 一. 2003. 「but の用法 : 『否定』の概念の展開」『英語表現研究』20, 11-19. 日本英語表現学会 .
  - 一. 2007a. 「談話辞 but の用法の展開と対応する日本語」『六甲英語学研究』10, 241-255. 六甲英語学研究会 .
  - 一. 2007b. 「at least の語法と類義表現」『英米文学研究』40, 1-13. 梅光学院大学英米文学会 .
  - 一. 2008. 「談話辞 actually の機能の展開」『論集』41, 78-88. 梅光学院大学紀要編集委員会 .
  - 一. 2009. 「英語の談話標識の特性 及び 日本語との比較」『論集』42, 30-44. 梅光学院大学紀要編集委員会 .
  - 一. 2010a. 「談話標識の特質 : 単独で用いられる談話標識を手がかりに」『論集』43, 43-54. 梅光学院大学紀要編集委員会 .
  - 一. 2010b. 「談話構成と表現表の日英語比較 : 談話標識 now と and を中心に」『梅光言語文化研究』1, 5-23. 梅光学院大学国際言語文化学会 .
  - 一. 2011a. 「談話標識の談話戦略的使用」『論集』44, 63-79. 梅光学院大学紀要編集委員会 .
  - 一. 2011b. 「日本語では表現されない談話標識 and」『梅光言語文化研究』2, 1-17. 梅光学院大学国際言語文化学会 .
  - 一. 2012a. 「談話の構造と談話標識」『梅光言語文化研究』3, 1-16. 梅光学院大学国際言語文化学会 .

- 一. 2012b. 「話法と談話標識」吉村・須賀・山本 (編) 『ことばを見つめて』169-178. 英宝社.
- 一. 2013a. 「談話の展開を合図する談話標識」『論集』46, 1-16. 梅光学院大学紀要編集委員会.
- 一. 2013b. 「推論結果を表す談話標識 so と then: 先行発話に対する話し手の態度の違い」『梅光言語文化研究』4, 1-19. 梅光学院大学国際言語文化学会.
- 松尾文子, 廣瀬浩三. 2014. 「英語談話標識の諸相 (1) —英語談話標識研究の変遷」『梅光言語文化研究』5, 1-38. 梅光学院大学国際言語文化学会.
- 西川真由美. 2002. 'Interpretive Use of Interjections.' 『人間文化研究科年報』17, 169-181. 奈良女子大学大学院人間文化研究所.
- Nishikawa, M. 2007. 'Interpreting Interjections: A perspective of relevance theory.' *22 Essays in English Studies: Language, Literature and Education*. 65-88. Tokyo: Shohaku-sha.
- 一. 2010. *A Cognitive Approach to English Interjections*. Tokyo: Eihosha.
- Norén, K. and P. Linell. 2007. 'Meaning potentials and interaction between lexis and contexts: An empirical substantiation.' *Pragmatics* 17 (3), 387-416.
- Norrick, N. T. 2009. 'Interjections as pragmatic markers.' *Journal of Pragmatics* 41, 866-891.
- Onodera, N. 2011a. 'The grammaticalization of discourse markers.' In H. Narrog and B. Heine (eds.), *The Oxford Handbook of Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press. 612-624.
- 小野寺典子. 2011b. 「歴史語用論の成立・現在、そして今後へ」『日本語学』30 (14), 123-136.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Polat, B. 2011. 'Investigating acquisition of discourse markers through a developmental learner corpus.' *Journal of Pragmatics* 43, 3745-3756.
- Redeker, G. 1991. 'Linguistic markers of discourse structure.' *Lingua* 29, 1139-1172.
- Rouchota, V. 1998. 'Connectives, coherence and relevance.' In V. Rouchota and A. H. Jucker (eds.), *Current Issues in Relevance Theory*. P&B ns. 58. Amsterdam: John Benjamins. 11-57.
- Rouchota, V. and A. H. Jucker (eds.). 1998. *Current Issues in Relevance Theory*. P&B ns. 58. Amsterdam: John Benjamins.

- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2001 / 2004. ‘Discourse markers: language, meaning and context.’ In D. Schiffrin, D. Tannen and H. E. Hamilton (eds.), *The Handbook of Discourse Analysis*. Oxford: Blackwell. 54-75.
- Schourup, L. 1985. *Common Discourse Particles in English Conversation*. New York & London: Garland.
- . 1999. ‘Discourse markers.’ *Lingua* 107, 227-265.
- . 2000. ‘Homing in on Discourse Marker Meaning.’ 『英語語法文法研究』 7, 5-17. 英語語法文法学会 .
- . 2001. ‘Rethinking *well*.’ *Journal of Pragmatics* 33 (7), 1025-1060.
- . 2011. ‘The discourse marker *now*: A relevance-theoretic approach.’ *Journal of Pragmatics* 43, 2110-2129.
- Schourup, L. and T. Waida. 1988. *English Connectives*. Tokyo: Kuroshio-shuppan.
- Schwenter, S. A. and E. C. Traugott. 2000. ‘Invoking scalarity: The development of “in fact.”’ *Journal of Historical Pragmatics* 1 (1), 7-25.
- Siegel, M. E. 2002. ‘*Like*: The Discourse Particle and Semantics.’ *Journal of Semantics* 19, 35-71.
- Spears, R. A. 1992. *Common American Phrases in Everyday Context*. Illinois: NTC Publishing Company.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986 / 1995<sup>2</sup>. *Relevance: communication and recognition*. Oxford: Blackwell.
- Stubbs, M. 1983. *Discourse Analysis*. Oxford: Basil Blackwell.
- Swan, M. 2005<sup>3</sup>. *Practical English Usage*. London: Oxford University Press.
- Tabor, W. and E. C. Traugott. 1998. ‘Structural scope expansion and grammaticalization.’ In Ramat, A. G. and P. J. Hopper (eds.), *The Limits of Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins. 229-272.
- Tagliamonte, S. 2005. ‘So who? Like how? Just what?’ *Journal of Pragmatics* 37(11), 1896-1915.
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子（編著）. 2011. 『歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する』 東京：大修館 .
- Takahara, P. O. 1998. ‘Pragmatic functions of English discourse marker *anyway* and its Corresponding contrastive Japanese discourse markers.’ In A. B. Jucker and Y.

- Ziv (eds.), *Discourse Markers: Descriptions and Theory*. P&B ns.57. Amsterdam: John Benjamins. 321-346.
- Traugott, E. C. 2011. 'On the Function of Adverbs of Certainty Used at the Periphery of the Clause.' 『語用論研究』 13, 55-74. 日本語用論学会.
- 内田聖二. 2011. 『語用論の射程：語から談話・テキストへ』 東京：研究社.
- Underhill, R. 1988. 'Like is, like focus.' *American Speech* 63, 234-246.
- Unger, C. 1986. 'The scope of discourse connectives: implications for discourse organization.' *Journal of Linguistics* 32, 403-439.
- Van Dijk, T. 1977. *Text and Context: Explorations in the semantics and pragmatics of discourse*. London: Longman.
- . 1979. 'Pragmatic Connectives.' *Journal of Pragmatics* 3 (5), 447-456.
- Wharton, T. 2000. 'Interjections, Language and the "Showing" / "Saying" Continuum.' *UCL Working Papers in Linguistics* 12, 173-213.
- . 2003. 'Interjections, language, and the "showing" / "saying" continuum.' *Pragmatics and Cognition* 11 (1), 39-91.
- Wilson, D. and D. Sperber. 1993. 'Linguistic form and relevance.' *Lingua* 90, 1-25.
- . 2000. 'Truthfulness and Relevance.' *UCL Working Papers in Linguistics* 12, 215-257.
- . 2012. *Meaning and Relevance*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Žegarac, V. and B. Clark. 1999a. 'A cognitive account of phatic communication.' *Journal of Linguistics* 35, 321-346.
- . 1999b. 'Phatic communication and Relevance Theory: a reply to Ward & Horn.' *Journal of Linguistics* 35, 567-577.

#### 辞書

- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. Cambridge: Cambridge University Press. 2003. [CALD].
- Cambridge International Dictionary of English*. Cambridge: Cambridge University Press. 1995. [CIDE]
- Longman Advanced American Dictionary*. London: Longman. 2000. [LAAD]
- Longman Dictionary of Contemporary English*. London: Longman. 1987<sup>2</sup>, 2003<sup>4</sup>. [LD<sup>2</sup>; LD<sup>4</sup>]

*Longman Dictionary of the English Language and Culture*. London: Longman. 2002<sup>2</sup>.

[LDEL<sup>2</sup>]

*Macmillan English Dictionary*. New York: Macmillan. 2007<sup>2</sup>. [MED<sup>2</sup>]

*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. Oxford: Oxford University Press. 2005<sup>7</sup>. 2013<sup>8</sup>. [OALD<sup>7</sup>; OALD<sup>8</sup>]

*Longman Dictionary of Contemporary English*. London: Longman. 2003<sup>4</sup>. [LD<sup>4</sup>]

### 引用作品

[小説]

Archer, J. *Not a Penny More, Not a Penny Less*. (1976)

— *Kane and Abel*. (1979)

Block, L. *Out on the Cutting Edge*. (1989)

— *A Walk among the Tombstones*. (1993)

— *A Long Line of Dead Men*. (1996)

Brown, D. *Deception Point*. (2001)

Clancy, T. *Patriot Games*. (1987)

Clark, M. H. *Let Me Call You Sweetheart*. (1995)

Cornwell, P. *The Scarpetta Factor*. (2009)

Grafton, S. “G” *Is for Gumshoe*. (1990)

— “J” *Is for Judgment*. (1993)

— “O” *Is for Outlaw*. (1999)

Grisham, J. *The Firm*. (1991)

— *The Street Lawyer*. (1998)

— *The Associate*. (2009)

Guest, J. *Ordinary People*. (1976)

Harper, K. *Falling in Love*. (1985)

Harrington, W. *Columbo: The Show Game Killer*. (1996)

Hays, L. *Columbo #5: Murder By the Book*. (1976)

Parker, R. *Thin Air*. (1995)

Segal, E. *Oliver's Story*. (1970)

— *The Class*. (1985)

— *Only Love*. (1997)

Sheldon, S. *The Sands of Time*. (1988)

— *The Sky Is Falling*. (2001)

Stallone, S. *Rocky II*. (1979)

Tyler, A. *The Accidental Tourist*. (1985)

[映画台本]

*Anne of Green Gables—the Sequels*. (1992)

*Die Hard 2*. (1993)

*Gosford Park*. (2002)

*Guilt by Suspicion*. (1992)

*The Devil Wears Prada*. (2008)

*The Firm*. (1997)

*27 Dresses*. (2009)